

埼玉大学「総合演習（総合学習研究）」参加

小林 久夫

1. はじめに

本稿は、「そこではいったい何がおこなわれているのか——演出の意図と参加者の意識のズレをめぐって——」の冒頭に記したように、それと対をなす論考である。このふたつの論考は、それぞれがそれぞれを補う関係にある。

社会学者鶴飼正樹は旅劇団のあり様を示す方法として自らの日誌を用いている。そのことにより、ある現象を一般化しようとする過程で捨象されてしまいがちなさまざまな事柄を、できるだけ丁寧に掬い上げようと試みた。こうした方法にならい、ここでは2007年度におこなわれたフリースクール彩星学舎と埼玉大学教育学部の共同舞台づくりを、私の日誌を掲載することで振り返る。

2. 玉大学教育学部「総合学習研究(総合演習)」概要

「総合学習研究（総合演習）」は埼玉大学教育学部で2007年度前期に開設された講座である。フリースクールの生徒と埼玉大学の学生がともに舞台をつくり、学内で

発表することを目的とする（フリースクールとの共同舞台づくりは、これまでに過去4回おこなわれている）。講座は毎週木曜日の3・4時限におこなわれた。会場は体育館に併設されているダンス室で、およそ10m四方の教室だった。参加者は彩星学舎の生徒約15名、埼玉大学の学生30名（教育実習などで参加できない場合もあり人数は大幅に変動した）のおおむね40名前後でおこなわれた。全体の統括を教育学部教授庄司康生先生が担当し、ワークショップの進行や舞台の構成を小林が担当した。彩星学舎の生徒は、全部で9回この講座に参加した。また、6月と7月に一回ずつ埼玉大学の学生が彩星学を訪問した。講座に対して大学生からは毎回「私たちが体験したことは何か」というレポートを提出してもらった。学生に提出してもらったレポートは、その翌週、すべて集約されそのまま学生たちに配布された。学生たちはそれらのレポートを読むことによって、自分たちが体験したことを確認した。講座では以下の【表1】のような手順で演劇ワークショップがおこなわれた。また、全11回の講座を終え、最終日の7月12日（木）に教育学部コモ棟1Fエントランスで舞台発表がおこなわれた。

【表1】舞台発表に向けたワークショップの構成

	ワークショップの意図	ワークの内容	具体的なワーク*1
初 期	その「場」の状況を把握するワークショップ (以下ワークショップをワークと表記する)	その場に集まっている人の特徴や、稽古をおこなっている空間の広がりや、「歩く」ことをベースにしたワークで体験する。アイスブレイキング的なワークが多い。	・すれ違い ・人のカタチ、ものの名前 ・Stop & Go
中 期	個々の身体の癖が明らかになるようなワーク 相手と呼吸を合わせるワーク	ペアを組み、相手の身体や声を手がかりにして、自己の身体に気づくワーク。同時に、相手と呼吸を合わせることを体感する。	・じゃんけん肩もみ ・背中あわせ ・声の色、声のカタチ ・輪速読*2
後 期	舞台構成にそったワーク	舞台発表用に構成されたシーンごとの反復稽古と、作品全体の流れを身体化するための通し稽古をおこなう。	・小返し稽古 ・通し稽古

以下の記述は、この講座をおこなうにあたって私が記録していた日誌である。講座の前半と後半では記録がや

や異なる。講座の前半は、まず私がその日におこなおうとしたワークを時系列にそって記述した(四角囲みの内側)。そのうえで、それに対し感じたことを感想として付記し

た。さらに、大学生のレポートも部分的に抜粋した。講座終了後、数日後に大学生からレポートが提出される。このレポートから私が気になった部分を抜き出した。ワークがどのように学生に受け取られたか、というのが私の主な関心事だった。講座の後半は、レポート提出を課さなくなったために、学生レポートの抜粋がない。学生のレポートは、その都度集約され翌週には参加者に配布されていた。しかし、以下の記述は参加者に配布されたわけではない。(個人名はすべて苗字で記入されていたが、ここでは彩星学舎の生徒を S+大文字英数字、大学生を 5,6,7+小文字英数字で表記することとする。)

3. 活動の記録

■5月10日(木)

- ・ レポート課題についての説明
- ・ 歩く (ものの配置を確認、人の特徴を観察)
- ・ 人の間をすれ違う
- ・ 形態模写での歩行
- ・ 拍をうつ、拍を合わせる
- ・ 全身入力
- ・ 全身脱力で周囲の音を聴く
- ・ 終了の挨拶

いよいよ今年度の講座がスタートした。庄司先生から 4 月中におこなった活動のレポート^{*3}をもらっていた。ここ数年思うのだが、「私たちは何を体験したのか」という問いに対するレポートの書き方にはパターンがある。そこはどのような場所でそこには誰がいるのか。時系列にそって何がおこなわれていたのか。そういったことはあまり書かれていない。それ以上に、「ここでおこなわれていることは何を意味してい

るのか。」あるいは、「その場を主催する人がどのような意図をもって、それぞれのワークをしているのか。」「そのワークの意図をくんで私が発見したことは何か。」「この場を私はどのように解釈したのか。」ということが書かれていることが多い。今日はまずこのレポートの書き方の話からはじめなければならないと思いつつ埼玉大学に向かう。

また、とにかく同じコースからの参加が多い^{*4}とも聞いていた。昨年この講座を選択した学生が、同じコースの後輩に「この講座は楽しいからぜひとるように」とだいたい宣伝してくれたい。そんなに楽しいことはないだろうと思った。楽しいと思ってくる人が多いならば、みんな失望するだろうな、などと考えつつ埼玉大学に向かった。

ダンス室に到着する。彩星学舎の生徒がすでに何名か到着していた。1・2 時限の庄司先生の講座が終わるまでダン

ス室の外で待つ。ほどなくして、1・2 時限の講座が終了し、会場であるダンス室に入った。庄司先生がいらっしゃった。簡単に打ち合わせをして、大学生たちがやってくるのを待つ。大学生が次第にやってくる。彩星学舎の生徒はとにかく大きな声であいさつをしている。今年彩星学舎に入った SM くんや SL くんは、まだこういう場自体がはじめてなので、どうしていいかとまどっているようだった。彩星学舎からはスタッフ 2 名、生徒 11 名が参加していた。しかし、そのうちの 1 名、SF くんは講座自体には参加せず、1 階の体育館入り口で燻製をつくっていた^{*5}。埼玉大学の学生に自分でつくった燻製を食べてもらうのだと前日から準備していた。彩星学舎では、たとえワークショップの場になくとも、こうした参加も参加のうちだった。

10:45. 開始の時間が 5 分すぎたところに講座ははじまった。予想以上に女性の学生が多かった。20 名程度は養護教員養成過程の学生さんだということだった。この学生さんたちは「どんな楽しいことが待っているのだろう」と思いながら参加しているのだろうか。大変だ。そんなことを思っていると、庄司先生がまず話を切り出しはじめた。「今日から彩星学舎の生徒さんとスタッフを迎えて講座がスタートします。どうぞよろしくお願いいたします。」庄司先生から彩星学舎と私についての簡単な説明がなされた。「それでは小林先生に、簡単に自己紹介をお願いします。」バトンわたされ私は簡単に自己紹介した。続いて、彩星学舎のスタッフの紹介をした。彩星学舎の生徒の紹介や埼玉大学の学生の紹介などは、おいおいゲームなどを通しておこなっていく旨をつげる。続けてレポートの課題についての説明をおこなった。話し始めてこれも毎年感じることだが、埼玉大学の学生はほんとうによく話を聞いてくれる。こちらをきちんと注視している。話を聞いているかどうかはわからないが、少なくとも話される内容は聞き漏らさないようにと集中して聞いているように見える。一方、彩星学舎の生徒は、まず SD さんが時折、いつものように手拍子をうったり、起き上がりこぼしのような動作を繰り返したりしている。また、SH くんが記録用のデジタルカメラを持って会場であるダンス室を出たり入ったりしている。SM くんは、私自身も今年初めて付き合うのでどう接していいかわかりかねていたが、床にねそべったり携帯電話をいじったりしていた。はたしてこうしている彩星学舎の生徒たちを、大学生はどのように見ているのだろうか。それが知りたかったので、とりあえずそのことを問題にしてみた。「毎回レポートを提出してもらいます。私たちが体験したことは何か。ちょっと大雑把ですが、とりあえず、この課題でいつてみたいと思います。ですが、たとえば、いままでの時間で私たちは何をしたのか、といったときにみなさんは何を書くことができますか。小林の話をきいた。たしかにそうでしょう。しかし、その一文で終わってしまうのでしょうか。その一文を読んだ人にはまったく何のこと

かわかりません。そもそもその場をどういうところなのでしょう。たとえば、ここには今どんな人がいますか。みなさんは先ほどからちゃんとこっちを見て私の話を聞いてくれますが、さっきからこのダンス室を出たり入ったりしている人がいます。この人はみなさんに認識されているのでしょうか。この人は記述のなかにあらわれてくるのでしょうか。さっきから手をたたいたり、床に転がったりしてしきりに音を出している彩星学舎の生徒がいます。この人も同じく認識されているのでしょうか。レポートのなかに入ってくることはあるのでしょうか。もしかしたら、私たちは今あげた人たちを知らないあいだに認識から外しているかもしれません。ほおっておいたら、こうした人たちはこの場にはいなかったことにもなりかねません。でも、実際に舞台を創っていくのは、ここに集まっているこの人たちとです。そういったことに気がついていくためにも、できるだけそこで起こっていること、自分たちがしたと思うことを、その場の状況も含めてしっかりと記述してみてください。その際、感想は書かなくてけっこうです。」

ここまでですでに 30 分の時間が経過していた。これ以上は彩星学舎の生徒の集中が続かないと思った。というか、もうすでに集中力は切れていた。なので、さっそくワークをおこなうことにした。前回のレポートは邪魔になるので、各自の荷物のなかにしまってもらった。

とりあえず、私たちがどのようなシチュエーションにあるのかということを知ってもらうようなワークから入った。会場内を歩き回る。この場所にはどんなものがあるのか。ここに集まった人たちはどんな人たちなのか。それを体感としてわかってもらうゲームから入ることにした。

【ワーク① 歩く（ものの配置を確認、人の特徴を観察）】

まず、会場のなかをランダムに歩いてもらう。そして、私が「ゴー」といって手を叩いたら進む。「ストップ」といって手を叩いたら止まる。指示が通るようになったら次に、その場には何があるのか観察しながら歩いてもらう。「ストップ」の合図とともに、私がものの名前を叫ぶ。指定されたものがどこにあるかわかった人は、そのものがある場所を指差す。この間、いっさいしゃべらない。最初は、「時計」や「鏡」、「きぐるみ」「モップ」といったものに焦点をあてた。次に個人が持ってきている持ち物を取り上げた。その場にあるものに対し注意を喚起する。次にそこに集まっている人たちがどのような特徴をもっているか観察しながら歩く。これも私が「ストップ」と指示を出し、そのあとに人物の特徴を示すのでその特徴をもつ人の方を指差す。ただし、自分を指差してはいけない。特徴としては、「メガネをかけている人」、「髪の毛を染めている人」、「靴下をはいている人」といった、観察していればそれなりにわかりそうなものをあげる。しかし、徐々に「怖そうな人」や「あたたかい人」と

いった印象についてもきいていく。この間もいっさいしゃべらない。ワークに参加したくない人は、参加しなくてよい旨伝える。

埼玉大学の学生は「止まる」「動く」の動作をきちんとこなすことができた。しかし、しゃべらないということにはなれていないのか、少し散漫に感じた。参加しなくてよいとはいったものの、大学生はいちおう全員参加している。彩星学舎の生徒では、やはり今年始めて講座に参加している生徒が、ワークには参加しようとはしなかった。また、参加した生徒でも身体をしっかりと「止める」こともできない生徒がいた。なかなか自分の身体をうまく制御できない。彩星学舎の生徒でも 2 年目、3 年目の生徒はさすがにこれまで何度となくやってきているので、止まらなければならないところではきちっと身体を止めることができていた。「怖そうな人」という項目で男子学生がひとり全員から指を指されていた。体格がいいからだろうか。私の今日の収穫は、全体のなかで彼の存在が確認できたことだ。全員で指を差したのだから、参加者全員が彼のことを認識できたと思う。どんなことでもいいので、全員のなかから「この人は」という特徴を明らかにしていく。これが、まず私がやらなければならない作業だと思った。また、彩星学舎には義眼の生徒や片手が麻痺している生徒もいるので、このワークでそうした注意も喚起できればと思った。はたしてどの程度観察できただろうか。

歩くワークからはじめたので、そのまま、身体感覚でそこにいる人の特徴を把握するワークを続けることにした。

【ワーク② 人の間をすれ違う】

どちらとも決めずに会場内を歩いてもらう。スピードもそれぞれのペースにあわせるかたちで歩く。しばらく歩いてから、誰でもいいのでふたり対象を決めて、そのふたりの間をすり抜けるようにする。しかし、当然、相手も対象を決めて歩いているので、目標のふたりはすぐにどこかに消えてしまう。うまくすり抜けられても、そうでなくても、すぐにまた新しいふたりの対象を見つけそのふたりの間をすり抜ける。この間、おしゃべりはしない。また、絶対に相手にぶつからないことを徹底させる。衣服がすれ合うことも禁止にする。慣れてきたようならば「今の倍の速さですり抜ける」よう指示する。さらに、それでも大丈夫なようならば、「自分が動ける最大のスピードで」という指示を出す。しかし、この場合は「絶対にぶつからないこと」を強く強調する。「ぶつかってしまうスピードは、自分が動ける最大のスピードを超えている」ということも指摘する。

普段、通学で電車を利用している学生や生徒には、それなりになれている作業ではないかと思う。しかし、そうで

はあっても、ここに集まった人たちのなかでそれができるかどうかは、また別の問題だ。そこにいる人たちをより敏感に、体感でとらえてもらうためと思いやってみた。それなりに混乱なくふたりの間をすりぬけているようなので、さらにスピードを速めていった。いったん、スピードをゆるめ、そのまま今度は、誰かの歩き方の癖をまねて歩いてみるよう指示した。

【ワーク③ 形態模写での歩行】

誰でもいいのでひとり対象を決めて、その人に悟られることなくその人の歩き方をまねて歩く。この間、しゃべらない。まねをしている相手に気づかれないことを強調する。

特徴的な歩き方をしている人を見つけてその人のまねをする。気づかれないようにということを強調するのだが、彩星学舎の生徒は自分がまねをされていると思うと、さらに大げさにその歩き方を誇張していった。おしなべて埼玉大学の学生はまねをする方が多く、彩星学舎の生徒はまねされることが多かった。しかし、「特徴的な歩き方」という指示があるので、そのうち全体がある特定のひとりの人のまねをして歩いている状態になってくる。彩星学舎の生徒のあとに何人も続いている場合は、「〇〇（くん／さん）、後ろにいっぱい続いているよ」というと、埼玉大学の学生にその人の名前がアナウンスされる。これは、どのようにその人を呼べばいいのか、どのようにその人と接していいか、大学生の目安になる。昨年の講座のミーティングで、庄司先生から指摘されたことを思い出した。私がどのように彩星学舎の生徒と接しているのか。埼玉大学の学生にとっては、それが彩星学舎の生徒とどう付き合うかの、ひとつのモデルになっている。そのような指摘だった。それ以来、彩星学舎で普段呼んでいるように、この講座でも意識して呼ぶようにしている。また、彩星学舎で普段彼らに接しているように、この講座でも接することを意識した。

さらに、深く相手を観察しながら、今度は呼吸を合わせて何かすることができるか、やってみた。

【ワーク④ 拍をうつ・拍を合わせる】

方向を決めずに会場内を歩く。対面から来る人がいたらその人と拍手を1回合わせる。そのとき、相手と拍手がしっかり合うためにはどうすればいいか、考えながらお互い拍手する。この間、しゃべってはいけない。拍手が合わせやすい人、合わせにくい人の違いはどこにあるのか、注意しながら拍手を合わせる。ひととおりますんだら、次は合わせる拍手を2回にする。このときも2回の拍手がしっかり合うようにする。とくに2回目の拍手がしっかり合うようにするにはどうすればいいか考える。ここまですでいったんワークをやめて、拍手をあわせるためには何

が必要か、参加者にきいてみる。参加者から合わせるための工夫をきいたあと、ふたたびワークに戻る。最後に、拍手を1回うつのか、2回うつのかを決めないで合わせるには、どうすればいいか実際にやってみよう。

拍を合わせることは意外に難しい。大学生たちに合わせる工夫をきいてみると、「目を見る」「手の振りを大きくする」「身体をきちんと正対させる」などがあがった。合っていないことがわかっていないのか、大学生たちはあまり合わせようとする工夫をみせなかった。自分たちがしていることを少し離れて見た方がいいように思えた。そこで、集団をふたつにわけ、一方のグループはワークをおこない、もう一方のグループはそれを観察するようにした。立場を入れ替えて2回ほど繰り返しやってみた。そうすると、それなりに発見があったのか、だんだん拍手が合うようになってきた。

【ワーク⑤ 全身入力】

全員床に仰向けで寝転がる。手はおなかの上で組まずに身体の前におく。足は肩幅程度にひらいておく。深呼吸をする。ここから身体の前部分に力を入れていく。まずは、右手をにぎり、合図のあと10秒間全力でそのこぶしをにぎりこむ。終わると脱力。次に左手をにぎり右手と同じように全力で10秒間こぶしをにぎる。次に、右足のふとももとを硬直させる。右足全体に思い切り力をいれる。ふくらはぎや足先に力を入れるとこむらがえりを起こすこともあるので、腿にぐっと力を入れる要領で右足全体に力をつける。これも10秒間おこなう。次に同じことを左足でもおこなう。次に奥歯を全力で10秒間かみしめる。最後に、左右のこぶしをにぎり両足に力を入れ、奥歯をかみしめ全力で全身に力を入れる。その力がへその下3cmのところまで全部あつまるイメージを強くもって、10秒間、全力で力を入れる。全部で6回、全力でそれぞれのパートに力を入れる。力を入れる方を説明している間は、なるべく身体を休ませるインターバルにあてる。この間、いっさいしゃべらない。

【ワーク⑥ 終了のあいさつ】

終了のあいさつはタイ式のあいさつだった。彩星学舎では毎年2月にタイへの研修旅行をおこなっている。普段からタイを意識するようにと、数年前から朝のあいさつ、帰りのあいさつはタイ式のあいさつになった。胸の前で手を合わせ、男性が「サワディーカップ」、女性が「サワディーカー」という。宗教上の理由などでやりたくない人はやらなくてもいい旨づける。

SDさんがあいさつのリードをおこなう。SDさんに続いて全員であいさつをする。埼玉大学の学生はほぼはじめてだったので、4・5回繰り返して練習する。SDさんは

一番大きな声であいさつをするので、今日1日で大学生にだいたい名前を覚えてもらっていたようだ。

【埼玉大学生の記述から】

彩星学舎の生徒の様子がどのように記述されているのかを見てみた。講座のなかで私が学生に話したことを受けてか、彩星学舎の生徒の様子を記述している人が何人かいた。ダンス室を出入りしている生徒や不必要に音を出している生徒のことが気になった、という記述が何名かのレポートに登場した。「小林先生の話聞いた。その話し中、そわそわしている子がいて、私は何度かそちらを見た。」という記述や、「彩星の女の子が声をあげていた。気になったのだが、振り返ってみるということとはなかった。」、「彩星学舎の児童・生徒は自分に正直に、声を出したかったら声を出し、がさがさと紙をいじっていたりしていました。」などだった。

そのなかでふたりの学生の記述が気になった。それは、彩星学舎の生徒を「障害をもつ」や「普通ではない」という表現で表したことだった⁶⁾。ひとりは彩星学舎の生徒を「どういった基準をもって普通と定義するかは分からないため、あくまで自分自身の主観・経験則からのこととなるが、普通の子どもたちと定義する人は少数派である。」と記述している。もうひとりは、彩星学舎の生徒を「障害を持っている人もいた。」と記述していた。私にはどうしてもこの箇所が引っかかった。「障害」とか「普通」というのはどういうことなのだろうか。気になって仕方がなかった。だから、そのように記述した人たちそれぞれに、次回までにレポートしてもらうことにした。

ひとり目には「主観・経験則からの「普通の子ども」を説明して下さい。「私」は「何をもって普通」とし、彩星学舎の生徒を「何によって普通でない」と判断をしましたか。」というものだった。もうひとりに対しては、「障害を持っている人もいた」を説明して下さい。その際、「障害とは何か」、「何をもって『障害を持っている人』と判断したのか」を明記して下さい。」というレポートを、次回提出してもらうことにした⁷⁾。

【ワーク①】

学生のレポートに次のようなくだりがあった。「どこに何があるのかということよりもむしろ、先生は次に何を指せと言ってくるだろうかと考えていた。何か特徴の強いものを探そうとしていた。結果的に、悉くその予想は裏切られたわけだが。」このように講座を受けている学生は何人いるのだろうか。興味深かった。

【ワーク②】

あまり印象に残らなかったのか、レポートで触れている人は少なかった。「歩いている時に人にぶつからないよ

うに早く歩いたり、人の間をすり抜けたり、いつも駅でやっていることみたいなことをやった。みんな同じ方向でぐるぐる廻るのは癪なのであえて教室を横切ったり、反対周りをしりした。」という学生がいた。

【ワーク③】

このワークもあまり指摘している人はいなかった。ワークをしたとは書いてあっても、相手のどこをみてどのようにまねをしたのかまで言及している人は少なかった。

【ワーク④】

拍手が思ったよりも合わないことが記述されている。彩星学舎の生徒となかなか合わせられない様子がよくあらわれている。

【ワーク⑥】

SDさんがだいたい注目を集めていて今日1日で多くの大学生に名前を覚えてもらったことがわかる。

提出されたレポートは全体的に時系列があやふやなものが多かった。ワークとワークの順番が入れ替わっている人が何人かいた。これは「今、何のワークをしているか」という区切りをこちらからあえて提示しなかったからではないかと思う。たしかに、ほぼ歩きっぱなしのワークのなかで、ワークとワークの区切りがわかりにくかった。あとで振り返ったときに、その境界があいまいになりやすいのだろう。また、感想はなるべく書かないようにと指示したが、記述の半分以上が感想の人も多かった。感想を抜いてしまったら、ほとんど文章が残らない人もいた。こうした感想からは、参加者が何を見て何をしたのかわかりづらい。次回はまずそのことの指摘からはじめようと思う。

■5月17日(木)

- ・ 庄司先生のお話（表のカリキュラム、裏のカリキュラム）
- ・ 人の間をすれ違う（すりぬける）
- ・ ゲーム「すずめのお宿」
- ・ ゲーム「ガッちゃん」
- ・ ジャンケン肩もみ（肩をたたく→手のひらのつぼを刺激→うでのつぼを刺激→頭を刺激）
- ・ 背中合わせで立つ（背中合わせの状態で合図なしで立つ→背中を揺らす→背中をぶつ→背中で伝える→背中で押す→背中の体重を預ける→背中を合わせた状態で合図なしで立つ）
- ・ 背中を叩く

講座がはじまり庄司先生のお話があった。学校教育で何が学ばれているのかを考えさせる内容のお話だった。先生のお話のあと、前回レポートのなかに出てきた「障害」「普通」について話をしてからワークに入ろうと思って

いた。しかし、そのころにはすっかり彩星学舎の生徒の集中が切れていて、講座全体が散漫になっていた。頻繁に会場に出入りするものや、大きな音を出すもの、小声で独り言をいい出すものがいた。前回、学生には、その場にはどのような生徒がいたか気づいていたかという問いかけをしていたので、かえってそれらの行動に目がいってしまったようだ。その結果、庄司先生のお話を聞けなくなっているようでもあった。そこで、今回の講座はすぐにワークに入ることにした。

すぐにワークに入ることにしたまではよかったが、自分自身の準備ができていなかったのか、ワークのセレクト[※]が非常によくなかった。とくに前半のふたつのワークはこの時期にやるようなワークではなかった。それでも後半のワークは何とか持ち直したように思う。講座の最後に「障害」「普通」について話をする。

【ワーク① 人の間をすれ違う】

前回の講座でおこなった、人の間をすり抜けるというワーク。どちらとも決めずに会場内を歩いてもらう。スピードもそれぞれのペースにあわせるかたちで歩く。しばらく歩いてから、誰でもいいのでふたりの対象を決めて、そのふたりの間をすり抜けるようにする。しかし、当然、相手も対象を決めて歩いているため、目標のふたりはすぐにどこかに消えてしまう。うまくすり抜けられてもそうでなくても、すぐにまた、新しいふたりの対象を見つけてそのふたりの間をすり抜ける。この間、おしゃべりはしない。また、絶対に相手にぶつからないことを徹底させる。今回は倍のスピードではなく、今歩いているスピードよりも倍遅くしたスピードでふたりの間をすりぬけるようにする。慣れてくるようだったら、さらにそのスピードから倍遅くしたスピードにしてみる。

ゆっくり歩くということが意外にむずかしいことを認識してもらう。

【ワーク② ゲーム「すずめのお宿」】

全体の進行係が3人1組プラス1人の状態になるように指示し、調整する。プラス1人は「鬼」とする。3人1組になったら、そのうちのふたりが向きあう。向き合ったふたりは両手をひらいたまま前に突き出し、向き合った相手の手のひらを自分の手のひらと合わせる。合わせた手を頭の辺りまで持ち上げ、ふたりでひとつのアーチをつくる。このユニットを「お宿」とする。ふたりがつくったアーチの間に、残ったひとりが立ちひざですわる。この「お宿」のなかに入って座った人を「すずめ」とする。ここからゲームがスタートする。指示にしたがって、「お宿」、「すずめ」、あるいは、その両方が移動して、新しい「お

宿」、「すずめ」をつくるというルール。指示の種類は3種類ある。「鬼」がその3種類のうちから指示を選択し、全体に号令をかける。「鬼」によって「すずめ」という指示が出された場合、「すずめ」役の人はいままで入っていた「お宿」と別の「お宿」に移動する。そのさい、「鬼」役の人は移動する「すずめ」に混じってどこかの「お宿」に入ってしまう。「お宿」に入れなかった人が次の「鬼」となる。同様に、「鬼」によって「お宿」という指示が出された場合、「お宿」になっているペアは、すべていったんペアを解消し、別のすずめがいる場所で新しくペアをつくりなおす。そのさい、「鬼」は移動する「お宿」に混じって、新しく「お宿」をつくってしまう。同じペア同士でそのまま別の「すずめ」のところに移動してはいけない。必ずペアを変えること。また、同じ「すずめ」の場所にとどまってもいけない。必ず場所を変えること。移動のさい、ペアができずにあぶれた人が「鬼」となる。「鬼」によって「嵐」という指示が出された場合、「すずめ」も「お宿」もすべて移動しなければならない。3人のうちの誰かひとりでも前のグループでいっしょだった人がいてはいけない。「お宿」も組めず「すずめ」にもなれずにあぶれた人が「鬼」になる。「鬼」は「すずめ」「お宿」「嵐」のどの指示を選んでもよい。

どうも「普通」「特別」の印象が自分のなかで大きくなりすぎてしまってワークに集中できなかった。本来ならこのワークは「声の色、声のカタチ[※]」の導入としておこなうべきワークだった。「声の色、声のカタチ」のワークに入るときに、この3人組のポジションが同じになる。そのことから、声のワークをおこなうときのアイスブレイク的なワークとして、「すずめのお宿」を用いていたはずだった。しかし、場の空気が重い気がして、とにかく身体を動かしてしまいたかった。それで、とっさにこのワークを入れてしまったのだが、不確定要素が多すぎた。彩星学舎の生徒のなかで、新規の生徒がどのように関わってくるか未知のままだってしまった。ゲームのルールを理解するにはやや時間がかかるゲームなので、SKくんなどはどうゲームに参加していいか困惑している様子だった。そんな状態に関わりなく大学生たちだけで盛り上がっているようにも感じられた。仕方がないので、中途半端なままゲームを終わらせた^{※10}。この時期にこのワークをやることにまったく意味がないわけではないが、印象としてはちょっと早すぎた。

【ワーク③ ゲーム「がっちゃん」】

手つなぎ鬼ごっこの一種。2人1組プラス1人の状態をつくる。プラス1人が「鬼」となる。2人組はジャンケンをして、勝った人が負けた人の後ろにまわる。ジャンケンに勝った人は電車ごっこの要領で負けた人の両肩

に両手をかける。かけた両手は離してはいけない。もしも離れてしまった場合は、先頭にいた人が「鬼」になる。ここからゲームスタート。「鬼」は2人1組のユニットに後ろから近づき、後ろの人の両肩に両手をかける。かけることに成功したら、両手をかけられた人は自分がつかんでいた前の人の両肩を離す。いままでユニットの先頭にいた人は、後ろの人からつかまれていた両手が離されることによってユニットから外れる。この外れた人が新しい「鬼」となる。ゲームが進み慣れてきたら、このゲームにはつかまらないための必勝法があることを示唆する。さらに慣れてきたら、「鬼」を1人から2人に増やしてやってみる。

とにかく身体を動かしたかったので、別のワークに移ることにした。しかし、これもルール理解に時間がかかってしまった。このワークも本来は、声を出すときに対象に向かって正対する姿勢をゲームのなかで覚えてもらうときにおこなうゲームだった。なので、やはりこの時期におこなうのは少し早いゲームだった。そしてこのゲームでもやっぱり、大学生だけが盛り上がっているように見えた。彩星学舎の生徒の、ゲームへの参加具合は関係ないようだった。大学に入ったばかりの1年生が多いことを考えると、大学生同士がまずグループ化される必要があるのだろう。そうこうしているうちに、本来2人でひとつのユニットをつくらなければならないところが、どんどんつながって7~8人でひとつの大きなユニットになってしまった。私自身が考えごとをしているせいか、随分と散漫なゲームになった。これも10分程度やってみて、「この時期には早すぎた」という理由で終了した。

【ワーク④ ジャンケン肩もみ】

参加者全員で大きな円をひとつつくる。右回りに「1・2・1・2」と番号をかける。番号が1だった人は円の内側に向かって1歩前に出る。前に出たら回れ右をして、番号2の人とペアをつくる。向かい合ったら「おねがいします」とあいさつをする。あいさつのあと、ペアでジャンケンをおこない、勝った人が負けた人に肩をもんでもらう。肩もみならば10回程度、肩たたきならば20回程度を目安にする。終わったらもう一度ジャンケンをして同じように勝った人が負けた人に肩をもんでもらう。「止め」の合図があるまでジャンケン肩もみを繰り返す。この際、肩をもんでもらっている人は「痛い」のか「効かない」のかしっかりと相手に告げる。もんでいるほうは「痛い」と「くすぐったい」の間にある「気持ちいい」加減をさぐる。身体に触れられたくない人はその旨相手に伝え、ワークを休んでいる。全員が4~5回ジャンケン肩もみをし終えたら、いったん今のパートナーに「ありがとうございました」とあいさつをする。円の内側にいた

番号1のグループは、ふたたび円の内側に入り、円の外側を向いて相手とあいさつをする。あいさつをしたら、番号1の内側のグループの人たちだけが、左手方向に1人分移動して、正面にいるパートナーと新しいペアをつくる。あいさつをして同じようにジャンケン肩もみをする。ただし、パートナーが変わっているため、同じ強さでやっていたのでは「気持ちよく」ならないことを強調しておく。それぞれの身体つきや感覚の違いを認識してもらう。全員が4~5回し終えたら、同じ要領でまたパートナーをチェンジする。次は、ジャンケンに勝った人が手のひらのマッサージをうける。パートナーを変える。次は、勝った人が負けた人から腕のマッサージをうける。さらにパートナーを変え、今度は頭のマッサージをする。肩→手のひら→腕→頭とマッサージの位置を変えていく。はじめは強めにやって「痛い」という地点を探す。「痛い」といわれたらそれ以上強くやらない。やりたくないワークがあったら、相手にその旨告げてワークを休むようにアナウンスする。

どうもルールがあるゲームをはじめるには時期が早すぎるようだった。なので、もういちど相手を丁寧に観察するようなワークにもどることにした。そこにいる人と一緒にできる簡単なワークといえば、この「ジャンケン肩もみ」だった。これからともに舞台をつくっていく大学生と彩星学舎の生徒とが、直接的な身体接触を通してしっかり対峙してもらうというねらいがある。個人個人の間にある違いに敏感になってもらえるだろうか。提出される大学生のレポートが楽しみだ。人の身体を触るので、「やりたくない人はやらなくてもよい」と、その点だけは強めに注意した。しかし、この指示自体は、実際どれほど学生の間に通っているかわからなかった。こういうときの大学生は、やりたくなかったり触られたくなかったりしても、ある程度我慢して参加してしまう。

【ワーク⑤ 背中合わせで立つ】

ふたりでペアを組む。ふたりが背中を合わせた状態で座る。手を使わず、掛け声もかけずに、背中を合わせた状態でふたり同時に立ち上がる。コツは、体重を背中の人にあずけること。お互いが体重を掛け合っていることを背中で確認する。その状態でお互いが足を踏ん張り、お互いに押し合っている背中の力を少しだけ上方にそらせると、意外なほど簡単に立ち上がることができる。背中の力がどのように自分に加わっているかがわかるようになれば、立ち上がるときの「せーの」といった掛け声も必要なくなる。進行役の人がモデルを全体に見せてからはじめる。はじめはコツも何もアドバイスしない。「なんとかしてふたりで立ち上がってみてください」とだけいって、実際にやってもらう。5分ほど各グループで試行錯誤

誤してもら。次に、背中合わせで座ってもらい、いくつかワークをする。尻からしっかりあわせ、背骨をひとつひとつ合わせるように指示する。最後は肩を開いて両肩がしっかり相手につくようにする。その状態で、お互い背中をゆする。その際、「やさしい気持ちで」「相手にケンカをうるように」など、具体的な場面をイメージでききるよう声かけをする。その後、背中で相手に情報が伝えられるか試してみる。お題をきめて、その内容が後ろの人に背中では伝わるかどうか実験する。「今日の晩御飯で食べたいもの」などが背中だけで伝わるかどうかを試す。次に、背中で押し合いをしてみる。相手をどれだけ押すことができるか、時間を決めておこなう。はじめは 3 秒間で後ろの相手を 30cm 動かすように、全力で相手を押す。動かすことができた方が勝ち。注意事項は、「手は使わないこと」、「背中をそらしてしまうと相手が非常に危険であるので、必ずお互いの背中をつけた状態でおこなうこと」、「足がすべる場合は靴下を脱いでおこなうこと」など。「はじめ」の合図でゲーム開始。次に、今度は 1 秒間で相手を 3m 押せるかどうかやってみる。さっきよりもより短い時間でいっきに力を出しきる。これも「はじめ」の合図でゲームをスタートさせる。最後に、時間は決めずに、とにかく相手がどこかの壁につくまで押ししていく。押し切った方の勝ち。ここまでゲームをおこなうと意外に疲れるので、もう一度背中をあわせリラックスできるワークをおこなう。背中合わせの状態、ひとりが相手に体重をかけていく。かけられた人は相手の重さのままに前屈していく。息を吐きながら前屈していき、息を吐ききったところで今度は状態を起こし、逆に相手に体重をかけていく。体重を乗せていき、最後は頭までダランと脱力できるように相手に上半身をゆだねる。しばらく交互に相手に体重を乗せあう。合図をして、背中合わせの状態のまますぐ座ってもら。このとき、はじめに背中を合わせたときよりも背中の接地面積が広がったと思う人がどのくらいいるかきく。また、背中があたたかく感じられるかどうかきいてみる。最後に、その状態でもう一度ふたりで立ち上がることができるか実験してもら。可能であれば、パートナーを変えて何人かとやってみる。

もうすでにどこかで体験したことがあるのか、何人かの学生はすぐにふたりで立ち上がることができた。彩星学舎の生徒相手に悪戦苦闘している学生も見られた。3 回ほどパートナーを変えてワークをおこなったが、人それぞれの力加減の違いに敏感になってくれただろうか。

【ワーク⑥ 背中を叩く】

ふたりでペアを組む。ジャンケンをして勝った人がうつぶせに寝る。負けた人はうつぶせに寝ている相手の右側面にすわる。負けた人は合図と同時に寝ている人の背

中を小刻みに平手で叩く。このとき、「痛い」と「くすぐったい」の中間にある「気持ちいい」加減を探す。はじめはすこし強めに叩き、相手が「痛い」というところまで、叩く強さを増していく。そこから今度は徐々に弱めていき、「気持ちいい」力の加減を見つける。「太もも」「ふくらはぎ」も同様に小刻みに叩く。もう一度背中にもどり、最後に大きく一回背中を「バンッ」と叩いて終了。寝ていた人と叩く人を交代し、同じワークをおこなう。その際「因果応報」という四字熟語を知っていますかと全体に声かけする。

これは単純に盛り上がるワークなので、講座全体は楽しい印象で終わることができたのではないかなと思う。

ワークが終了した後、簡単に前回のレポートに対してふれた。「障害」「普通」ということばを使用した学生に、どのような判断からこうしたことばを用いたのか再度レポートしてもらいようにお願いした。

はじめて講座終了後に学生と話をする。講座の時間外に学生と話をするのは、今年度になってはじめてなので緊張した。4 名ほどだったが、「歩く」のワークで周りから「一番こわそうな人」にダントツで指名されていた学生もいた。「普通とはなにか」ということについて、取り上げるきっかけとなったレポートの提出者も含まれていた。「普通とはなにか」ということについても、誤解があって、今後お互いがつまらなくなるのはいやだったので、できるだけ丁寧に話そうと思った。しかし、その場では十分に話ができたとはいいがたかった。時間はなかったが、簡単に今後について話をした。今後の講座で宮沢賢治の作品をテキストとして使用するの、何か印象に残っている作品があれば紹介してほしいとお願いした。短い時間だったが話できてよかった。30 人のなかで 4 名の名前と顔を特定できた。これは大きな収穫だった。

【埼玉大学生の記述から】

前回のレポートの書き方の指摘から、詳細に出来事を記述したレポートがだいぶ増えた。単純にひとりあたりの文字数が増えている。講座がはじまる前にひとりの学生がダンス室内においてあったきぐるみを頭からかぶっていた。それについて言及しているレポートも多かった。

「先輩が頭にきぐるみをつけていてかわいい。」また、ダンス室に入ってくる時の生徒のあいさつについて言及しているレポートも意外に多かった。フリースクールの生徒は暗いという先入観があるからだろうか。「この日も、ダンス室に入っていくと、彩星の人たちが元気にあいさつをしてくれた。見渡してみると、前回より人数が少ない気がする。それでも、前回に負けないくらいの元気なあいさつは、こちらもうれしいし気持ちがよかった。」など。

庄司先生のお話やワーク終わりでの小林の話など、「話を聞いた」という記述が目立った。しかし、どのような話を聞いたのかについて書かれているレポートはほとんどなかった。感想を書くレポートだと、たぶん聞いた内容について言及するレポートが増えてくるだろう。「何を聞いたのか」は記述することはできるので、次の講座でそのことに触れようと思う。

【ワーク①】

比喩的な記述もおもしろいかな、と学生のレポートをみて思った。「ゆっくり歩いているときの格好がおもしろかったことだ。皆ぎこちなく、ロボットがたくさん歩いていた。」

【ワーク②】

ルールが徹底されなかったことへの言及が多くの学生に見られる。「最初、私は「雀」の役をやった。移動しているうちになぜか「お宿」役の子が「雀」になってしまい、仕方なく「お宿」役にチェンジする、というハプニングもあった。」など。また、ゲームで笑いあう姿が記述されている。「初めて彩星の子と手をつないだし、笑いあうことができた。途中、「スズメ」といわれたのにお宿が移動してしまってお宿が一人になるという予想外の展開も起こってみんなで笑う。」笑いあうことがいいことなのかこの場ではちょっと気になった。だから、私はこのワークを早く切り上げてしまったのかと思う。抵抗を感じていてもワークに参加してしまう記述もみられた。「人と手を合わせることに抵抗を感じる。「早く雀になりたい。」と考えていたら、宿も雀もゴチャゴチャになる「嵐！」も始まり、やっとこ雀になれた。ある彩星の生徒と宿を作った時、うまく手を合わせてもらえなかった。もう疲れていたのか指先が曲がっていて、手も私が力を入れなければ下にストン！と落ちてしまいそうであった。私もすごく疲れを感じていた。」こういう場面は、なかなか現場では把握しづらい。

【ワーク③】

「電車鬼ごっこ」というネーミングをつけてくれた学生がいた。また、ゲームを終わらせるときの「早かった」ということばを、学生がどう受け取ったか、それぞれ違っていても面白い。「おにごっこをしたが1回目はルールがいまいちわかっていなくて気づいたら7人ぐらいの電車になっていた……もう1度ルールを聞いて私はやっと理解できた。2回目はちゃんと出来たけど、また3人以上で連なっているグループがあり、小林先生が「これやるのは早すぎた」と苦笑いしていた。私は「早すぎた」理由がよくわからなかった。」や、「先生が笑いながら「まだこういうゲームは早かったな」というようなことを言う。」「ルールを把握出来ていない子もいるからか、私た

ちにはこのゲームは早すぎた、ということで、ゲームは終了した。結構楽しかったのにな、と少し残念だった。」「難度が高いだろうということで、このゲームはすぐ終わった。」など。

【ワーク④】

指示された内容や、聞いた話などをきちんと記述することができるようになってきている。「美容院でやってもらうのを真似して、というようなことを言っていた。髪を触られなくなかったり、セットが崩れる人は先に相手に言うておくように、とも言っていた。」「小林先生が、「気持ちいいというのは、痛いとかゆいの間であるから、最初は強く押して弱めていくのが良い。」とおっしゃったので、強く押したつもりだったが、パートナーは何も言わなかったの、痛くないようだった。」などからそのことがわかる。痛いくすぐったいの違いも人による、ということがだいぶわかってもらえたのではないかな。

【ワーク⑤】

ある学生が次のように書いている。「この時私はすでに汗をかいていて、自分の汗が相手につくのも嫌だったし、相手の汗が自分の服につくのも嫌で正直やめたかったが2人で気まづくなるのも嫌だったので我慢してやることにした。」こうした学生の思いも、なかなかその場では把握できない。「体重の預け方が分からず、相手に「もっと寄りかかっていいよ」と言われても、上手く出来なくて、立てなかった。次の人には、少し体重を預けられた気がしたが、足が滑って結局立てなかった。相手に申し訳なくなかった。」「先生が言ったように体重を相手にすべてあずけるようにしてみたら……立てた！こうすればこんなにも簡単に立つことが出来たんだ、と感動した。嬉しくて何回も立ったり座ったりした。」立てたり立てなかったりしたことの違いを参加者には考えてもらいたい。

【ワーク⑥】

叩く側の人意外に疲れるといった感想が多い。「この叩く作業は最後には辛かった。早く、強く叩いていると手が疲れてくる。」「最後は速度を上げて、背中をボンと叩いたが、疲れてしまって速度も遅く、弱くなってしまった。」「案外疲れる。やってもらうときは気持ちよかった。」など。

【講座終了のあいさつ】

最後のタイ語でのあいさつがSDさんであることが大学生にもわかってきたようだ。学生のレポートのなかに固有名詞が出始めてきている。

■5月24日（木）

- ・レポートについて小林からの話
（「普通とはなにか」「障害とはなにか」）
- ・ストップ＆ゴー、クラブ＆ジャンプ

今日ははじめに、「普通とはなにか」、「障害とはなにか」について話をする。しかし、レポートからトピックを取り出して、それについて講座のなかで扱うことはリスクが大きい気がした。なぜ、リスクが大きいのか。それは、参加者がどんどん頭で理解することを先行させて、その場で起こっていることにあまり注意を向けなくなってしまう可能性があるからだ。

たしかに、「普通とはなにか」、「障害とはなにか」について考えることは必要だ。だが、それを講座のなかでやろうとすると、単純にワークをする時間が削られてしまう。そこに壁（障害）があると感じるかどうかは、実際にやってみて、それでもまだ壁があると思えばそれは障害なのだろうし、なにごとかをともになすことができた実感でできれば、そこに壁はないことになる。だから、どうしても舞台の成功を最優先したかった。しかし、これまで2回の講座で「普通とはなにか」、「障害とはなにか」を取り上げたのは私の方だった。このまま話題だけ提示して、今日からいきなりワークだけを先行させていくのは、あまりに無責任な気がした。しかし、あきらかに昨年よりも講座の雰囲気重かった。昨年度のように、彩星学舎の生徒や埼玉大学の学生が自ら率先してワークに取り組む雰囲気は、すでになくなりかけていた。

大学生に限ったことではないが、今、していることに「どのような意味があるか」わからないと、何もしない人がある。当たり前といえば当たりの話だ。しかし、いままでは、ワークをおこなったあとに説明をするという順番を守ってきた。あくまでも、ワークをしたあとに補足として説明をつけ加えてきた。ワークをやる前からワークの意味について説明したり、意図やねらいを話したりすると、参加者はこちらの意図やねらいどおりに行動しようとする。ねらいどおりにものごとを見ようとしてしまう。〈いま・ここで〉おこっていることを、説明どおりに読み解こうとする。そして、それ以上のことを見なくなってしまう。たしかに、意味を説明してからワークに臨むと、ワークは段取りよく進む。だが、メリットはそれだけだ。はじめに説明してしまうと新しい発見や想定外の出来事に出会う機会をははまず失われる。だからこそ、いままでは説明は必ずワークのあとにおこなってきた。そこでおこなわれたことがなんだったのかは、事後にそれぞれが認識したものを持ち寄ることで確認してきた。その場でおこったことを、それぞれが持ち寄ったことばによって追体験する。しかも、私の意図を一方的に話すのではなく、というかたちでワークをシェアしてきた。その原則を今年の講座では踏み外してしまったかもしれない。

なぜ、このような事態に陥ってしまったのだろうか。理由はさまざまに考えられる。

ひとつは、大学生が「普通」や「障害」といったことを考えることが先行しているため。

ひとつは、同じ学科・同じ専攻の学生が多いため。

ひとつは、彩星学舎の生徒で、昨年まで舞台をつくっていた生徒が卒業してしまったため。

ひとつは、私がいまの現状を招くような講座の方向づけをしてしまったため。

理由をあげて分析することも必要だが、しかし、もうすでにそのような状況に陥ってしまっているのだから、まずは、この「普通」「障害」の問題に区切りをつけておかねばならなかった。

まず、レポートを提出してくれた人の文章を全体の前で再読する。そのうえで、私がそれをどのように読んだのか、配布したレジュメの最後に載せた私の文章を読んだ。はじめのレポートから継続してふたりの人にこの問題についてレポートしてもらっていたが、そのうちのひとりとは今日から教育実習でこないということだった。なので、私がどう読んだのかという部分の検証作業は、今日来てくれていたもうひとりの学生と講座参加者全員の前でおこなった。一箇所私の側にミスリーディングがあるとその学生から指摘をうけた。それは全員の前で訂正した。こうした作業は全体の前でおこないたかった。個別にメールなどでやり取りをすることもできた。実際そう考えたこともあった。しかし、メールでのやり取りはすべてプライベートに処理されてしまう。それでは、せっかくこの講座全体でひとつの認識を作りあげてくチャンスがあるのに、みすみすそれを投げ捨ててしまうことになる。納得がいく部分もあるだろうし、どうしても腑に落ちない部分もあるだろう。しかし、それは個別に処理するべきではなく、全体の問題として提示しておきたかった^{*11}。

全体の前で、私が提出されたレポートをどう読み、その読みは妥当だったかどうかの検証をおこなった。そのうえで、私にとっての「障害」観について話をした。

私は自分の祖母の話からはじめた。

「今年100歳で他界した私の祖母は、近所に住んでいた聾啞のおばさんが家に訪ねてくると、ふたりでお茶を飲みながらよく話をしていた。その光景が小さかった私には不思議でならなかった。祖母は手話などいっさい知らなかった。家にやってくるおばさんは、「おうおう」といって、手を左右に動かしているようにしか見えなかった。しかし、祖母はそれでも「ほう、〇〇さんところの△△が、××で□□をしたのか。そうか、それはすごいな。」と、いって、当たり前のようにそのおばさんの話を聞き取っていた。会話が成立しているのだ。当時、手話の存在を知っていた私は、手話も使わないのに話ができることが不思議でならなかった。相手の話を聞こうという意味さえもっていれば、伝えたいという意味さえしつかりあれば、

伝えるための手段はどうにでもなる。重要なのは、そのようなことが信じられるふたりの関係かと思った^{*12}。後年、祖母とそのおばさんのことを、そのように回想することがある。

たしかにそういえば、小さいころの私の周りには、なかなかことばがでてこない人や、どこか足をひきずったような歩き方をする人がいた。そういう人たちは私たちの生活のなかに同居していて、そこに何の違和感もなく暮らしていた。しかし、年を重ねるにつれ、そういう人たちは私の生活空間から見えなくなっていった。そんなことを気にも留めていなかったが、しかし、大学を卒業して自分の生活のなかにそのような人たちが突然姿をあらわしはじめたときに、私は愕然とした。どう接していいかわからないのだ。何か知識が必要なのではないか。いまここで問題になっていることとまったく同じように、何か特殊な知識や技能を身につけない限り、そこにいる人たちと接することはできないと勝手に思い込んでしまっていた。

前回提出されたレポートのなかに、小学校のころ、いわゆる障害をもっているといわれている子どもと同級生だった学生の体験談があった。その学生の体験談のなかにも、小さいときに当たり前に遊んできたことが記されていた。いったい私たちは、いつごろから「いわゆる障害をもっているという人たちと接するには専門の知識や技術がなければならない」と考え始めるのだろうか。たしかに、知識や技術は必要だろう。しかし、それらはあくまでもよりよく接していくための手段であって、まずそれを身につけなければその人たちと接することができないわけではないはずだ。それなのに、いつのまにか知識や技術が先行しないと、あたかもその人たちと接することができないと思い込んでしまう。これはいったいどういうことなのだろうか。

実際、彩星学舎の生徒のなかには、心身に障害をもつと診断されている生徒はたくさんいた。右半身が麻痺している生徒もいたし、左目が義眼の生徒もいた。集中が続かずに教室を出入りする生徒もいた。アレルギーがひどく、ほとんど学校に登校できなかった生徒もいた。突発的に大きな声を出す生徒もいた。気分の浮き沈みが激しく、講座を休みがちな生徒もいた。がんばらなければという思いが強くて、体調を崩してしまう生徒もいた。人から馬鹿にされて人が怖くなって、しばらく家から出られなくなった生徒もいた。漢字がかけない生徒もいた。九九の計算ができない生徒もいた。しかし、特殊な知識や技能がなければ、そういう人たちとともに舞台をつくることはできないのだろうか。はたしてほんとうにそうなのだろうか。

そんなことはない。そして実際に何十回となく私たち

は舞台をつくってきた。この講座でやりたいことは、「障害があろうがなかろうか、学校にいていようがいまいが、普通だろうが普通じゃなかろうが、そんなことに関係なく、ともに舞台をつくることはできる」。それを実際に実証してみせることだ。

もし、そんなことはしたくないと思うのであれば、別に今後出席しなくてもかまわない。課題図書を読んで「普通とはなにか」「障害とはなにか」についてレポートを提出すれば、以後の講座の出席を免除する。この講座に参加したくない人はそのようにしてほしい^{*13}。

私は参加者全員にそう告げた。そして、実際に 10 冊ほど参考図書をダンス室の中央に並べた。「今後は、障害があろうがなかろうが、普通だろうが普通じゃなかろうが、そんなことに関係なく舞台をつくろうと思う人だけが出席してほしい。」最後に私はそう告げて話を終わりにした。これは、今後、この講座を進めていくうえでの、ひとつの賭けだった。

【ワーク① ストップ&ゴー、クラップ&ジャンプ】

歩くことを中心に自分の身体について考えるワーク。まず、全員で会場内をランダムに歩く。進行役はまず 2 種類の指示どおり動くよう全員に徹底する。また、歩くときはしゃべらないことも徹底する。2 種類の指示は、「GO」といった場合は進み「STOP」といった場合は止まる。止まるときは、呼吸による身体の微妙な動きもできるだけおさえるようにする。まばたきもしない。これができるようになるまで数回繰り返す。全体がだいたいできるようになったら、さらに指示を 2 種類つけたす。「CLAP」といったら手をたたく。「JUMP」といったらその場で跳ぶ。「GO」の合図で全員は動き出し会場内を歩く。進行役は「GO」、「STOP」、「CLAP」、「JUMP」の指示を組み合わせて出す。全体が指示を理解し、その指示にそって行動できるようになったら、指示している内容を組み替える。はじめは、「GO」といったら止まり、「STOP」といったら動きだすようにする。全体を半分に分けて、半分は実際にワークをおこなう。残りの半分はそれを観察する。次に「CLAP」といったらジャンプし、「JUMP」といったら手をたたく。同じように半分はワークをおこない、あとの半分はそれを観察する。最後にすべての指示内容をかえた状態でワークをおこなう。「GO」は止まれ、「STOP」は進め、「CLAP」はジャンプ、「JUMP」は手をたたく。ワーク終了後、参加者にワークの感想をきく。「GO」と「STOP」の内容を入れ替えた場合と「CLAP」と「JUMP」の内容を入れ替えた場合ではどちらがより難しかったか。見られている場合と見られていない場合では気持ちの持ちようが違うのか、など。

自分たちの行動とことばがどのようにつながっているのか。見られるという場面では見られていない場合と比べてどう違うのか。このふたつのことについて、考えるきっかけになってもらえたら成功である。とくに前半で「障害」「普通」といった話をしていたので、それらの問題を考えるきっかけになるワークを選んだ。ワーク終了後、彩星学舎の生徒が普段感じているもどかしさについて話をした。指示されたことがうまくいかない。それを人前で指摘されることによってさらに緊張度が増し、動きがギクシャクしてしまう。よけいもどかしさを抱えてしまう。しかし、当たり前のようにできている人間からしてみれば、そうしたもどかしさになかなか気がつけない。以前、このワークをしているときに、「もうちょっとでキレそうだった」といった参加者がいたが、そのようなもどかしさを体験してもらえればと思う^{*14}。

【ワーク② ねによろ】

ふたりペアになりジャンケンをする。負けた人が仰向けに寝転がる。勝った人は負けた人の足側に座る。足の甲を両手で軽くつかむ。持ち上げる必要はない。持った手を左右に振り、つま先同士がついたり離れたりするように足を振る。小刻みになるべく早く振る。振っている足のゆれが太ももあたりまで達しているかどうか確認する。太ももあたりが左右にぐにゃんぐにゃんになって振れるにはどうすればいいか試行錯誤してみる。次に、持っていた手をかかと側に持ちかえ、かかとを 15cm ほど持ち上げる。このとき、寝ている側の人は自分の力で足先を上げようとしてはいけない。相手にあげられるままにまかせる。かかとを持ち上げた人は、かかとを前後に小刻みに動かしてみる。前に押す、自分側に引く。これができるだけ小刻みにすばやくおこなう。最後は自分側にかかとを引っ張る。寝ている人が引っ張られて動くか動かないかというぎりぎりのところで力加減を調整する。かかとをおろし、もう一度足の甲側をつかむ。今度はつま先が同じ方向に向くように左右に小刻みに揺らす。できるだけ早く小刻みに揺らすと、足先でできた揺れが、膝、腰、胸、頭と時間差をもって伝わっていく。このとき、波がうねるようにうねうねとうねり、足先から頭の先まで揺れが伝わるよう工夫する。蛇がうねうねと移動するような感じで身体が波打つならば、かなり全身の力が抜けていると判断できる。その際、人間を水の入った袋にたとえ、その袋を左右に転がすようイメージする。うまくいかない人には実際に手本を示すか、いっしょにやってみる。いったん終了し、もう一度、かかとにもちかえ足を持ち上げる。持ち上げた自分の側にゆっくり引っ張る。寝ている人が引っ張られて動くか動かないかというぎりぎりのところで力加減を調整する。再度、かかとをおろしもう一

度足の甲側をつかむ。つま先が同じ方向に向くように左右に小刻みに揺らす。コツがつかめてきたら、先ほどよりも大きな波をつくるにはどうすればいいか試行錯誤してみる。最後に、もう一度かかとを持ち上げ、持ち上げた状態で全身に波が生まれるように身体を揺らしてみる。この間、一切声を出さない。ひととおり終了したら、パートナーと交代する。自分の身体を水のはいった袋のようにイメージする。緊張をほぐすワーク^{*15}。

今日の講座は身体も頭もしっかり使ったので、最後にリラックスして終わりにしようと思い「ねによろ」を最後にもってきた。ワークの最後に「身体が重くなったと感じた人」と質問をしたら 10 人程度が手をあげてくれた。「眠くなった人」と質問したら、ほとんどの人が手をあげてくれた。

【埼玉大学生の記述から】

今回のレポートは、体験したことすべてを時系列に沿ってではなく、印象に残ったことをひとつ取り上げてレポートしてもらった。小林の話を聞いたことをあげている学生もいた。

【小林の話を聞く】

ある学生の記述のなかに、「いつも話を聞くときには周りが気になったり、散漫だったりしていた」ということが書かれたあと、「しかし、今回は先生の話がどんどん頭の中に入ってきた。」とあった。そして、その後のワークを今回の話と結びつけて「このとき、「先に入っている知識が邪魔をして、動けないのだ。」という先生の言葉が体験できた。」と記述している学生がいた。実際に自分の小学校の体験をもとに今回の話を振り返っている学生もいた。

【ワーク①】

見られるということについて敏感に反応してくれた学生が何人もいた。「ワークを終え、小林先生が「見られているという緊張」についてお話をされた。小林先生がお話をされる前から私は緊張を感じていたので、話を聞きながら、「初めに全員でワークをした時、小林先生の前を通ると緊張したのは、見ている人が小林先生だけだったからなのだろう。半数のグループに分かれて緊張が高まったのは、見ている人が増えたからなのだろう。」と思った。」また、別の学生からは次のような指摘もあった。「見られているからか、見られていないときに比べると幾らか集中力が高まっていたため、間違えが減った。」ことばと行為がつながらないもどかしさについて言及している学生のレポートもあった。「最後に小林先生がまとめのお話をした。「学校に上手く馴染めなかったり、学校に行けなくなってしまう子は、私たちが今やったワークで感じたように、自分の考えと動きが合致しなかったり、普段とは違う行動や自分が上手く出来ないことをやったり

するときに、嫌な気持ちになっていたり、それを更にみんなの前でやらなければならない場面があると、もっと嫌な気持ちを持っている」というようなお話だった。やっている間、確かに、自分が頭の中で認識している言葉の意味ではないことを行動に移すことに、もどかしさや、やりにくさをすごく感じていた。」

【ワーク②】

ちょっとしたことだが、身体の扱い方について違いに気がついてくれる学生がいた。「小林先生に体を揺すられると、今までのペアの人とは違い、頭までゆらゆらと揺れた。小林先生の方が揺らし方が速く小刻みだった。」

■5月31日(木)

- ・ 輪になって座ることについての小林の話
- ・ すれ違い
- ・ あいさつ「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」
- ・ この講座でやろうとしていることについての小林の話
- ・ 全身入力

ワークをはじめる前に気になっていたことを話した。「なぜダンス室の壁に沿うように、みなさんはひとつの輪になって座るのですか。」ひとりの学生が、「誰かが1回目の講座の始まる前に輪になろうと呼びかけたから」といった。どうも7rさんらしかった。本人もそうだった。「では、前回と同じところに座った人はいますか」と聞いてみた。同じようなところに座った人もいるし、そうでなかった人もいた。しかし、壁一面が鏡になっている面には彩星学舎の生徒が、それ以外の壁には埼玉大学の学生がという並びは、すでに固定していた。続けて「前回と隣り合っている人がだいたい同じ人はどれくらいいますか」と聞いてみた。この質問に対してはほぼ全員が前回と同じだと答えた。「この並びはいつか混ざることがあるのだろうか」と質問を投げかけて、それは答えを聞かなかった。そのかわりにニューヨークがなんと呼ばれているか聞いてみた。「人種のサラダボール」と学生が答えてくれた。昔はなんと呼ばれていたか聞いてみたが答えはなかった。知っていたかもしれないが、「人種のるつぼ」と答えてくれた学生はいなかった。別に意識して混ざってもらいたいわけではなかった。混ざることが重要ではなくて、そのような状態にあるという認識を持ってもらいたかった。「はじめての場所にいけば、当然不安になる。少しでもその不安を解消しようとして、よく知っているものの近くに行こうとするのは、当たり前といえば当たり前だ。そうやって安心を得ることにつながるのであれば、そのこと自体が悪いことだとは思わない。しかし、では、そのような安心できる輪をもっていない人にと

ってこの状況はどうだろうか。この場合は居心地がよい場所だろうか。周りには知っているもの同士の輪がいくつも存在している。そしてそれが日を追うごとに強化されていくように見える。私はその輪に入るきっかけすらない。その人にとってこの場はどのように感じられるのか。考えてみてほしい。」そういう前置きを20分ほどしてから、ワークに入った。

講座の終わり近くに、7kさんから「先生は養護教員と養護学級の教員を混同しているのではないか」という指摘を受けた。養護教員にしる、養護学級の教員にしる、不登校という現象にかかわりがあるのだから、問題にしようとしていることは理解してくれていると思っていた。しかし、どうもそうではないらしかった。残りの時間30分ほどを使って、私たちがこの講座で何をしようとしているのか、話をさせてもらった。本当は朗読に向けて声のワークに入っていきたかったのだが、そうもいっていらなかった。たとえば、どのくらいの人々が今やっているワークで、ここに集まっている参加者を認識できているだろうか。「普通」という単語や「障害」という単語がひとり歩きして、〈いま・ここ〉に集まっている人たちを見えにくくしていないだろうか。目の前にある違いをまず認識し、その違いを抱えたまま、どのように舞台をつくることができるか。そうした視点が、提出されるレポートからはなかなか読み取れない。そのことへの苛立ちが、私のなかにはあったのかもしれない。

「今日までのワークで義眼の生徒がいることに気がついていましたか。あるいは右手が使えない生徒もいますが、そういう生徒に気がついていのでしょうか。ものすごい量の薬を処方されて普段どうしてもボーッしてしまう生徒もいます。そういう生徒たちに気がついていのでしょうか。それらが原因となっていじめられ不登校になった生徒もいます。保健室登校だった生徒のことを考えれば、養護教諭だってまったく関係ない話ではないはずです。」

これまでのワークとそれらをめぐる話は、すべてそうした違いをまずしっかり認識してほしくておこなってきたものだった。「たとえば、障害があったり不登校だったりした生徒の舞台を見るときに、私はいつも違和感を覚えます。その人たちがやりたいのかやりたくないのかよくわからないけれども、とりあえず舞台のうえに出されている。舞台のうえであまりおもしろそうにしていなかった場合もある。私はそういう舞台を見るたびに、車椅子だっ

ら、その人たちも出演できるような舞台をつくればいいのになってしまう。こういう舞台はともに舞台をつくっているといえるのか、常に疑問に思ってしまいます。」

そういう話をしている最中に、SMくんがデジカメを7bさんに向けていた。撮っているのかどうかはわからなかったが、気になったので声をかけてみた。「カメラ向けられているね。彼が気になっているようだけど大丈夫？すごく注目されているようだけど。」すると、会場の空気が一瞬ゆるんだ。「でも、嫌だったらいってください。」という、彼女は「あっ、大丈夫です」と笑顔で答えてくれた。

「舞台上で間違いが決定する瞬間というのはどういうときかわかりますか。本人が間違えたただと、見ている観客からはあまりわかりませえん。「しまった」という顔をすればわかってしまうかもしれませんが、本人がそんな顔せず堂々としていたら、それこそ間違いかどうかはわかりません。決定的な瞬間というのは、周りがそれを間違いとして扱ったときです。台詞や段取りを間違えたときに、周りの人が間違えた人のほうを一斉に見たら、そこで間違いが観客に伝わります。目で間違いを合図したり、「それ違っている」という素振りを見せたりした瞬間に、その人の間違いは確定します。同じように、障害があるかどうかは、本当は客席からだってわからない。車椅子を使っているでもそれがある舞台効果に見えるなら、それはあくまでも舞台の装置にしかならない。車椅子なら車椅子を前提とした舞台をつくればいい。右手が使えないなら、右手が使えないことを前提にした舞台をつくればいい。台詞がおぼえられないなら、それを前提とした舞台をつくればいい。でも、台詞を覚えられないからといって目に見える形でプロンプトをつけたり、右手が使えないからといってその人の右側に常にもものを持ってあげる人を配置したりしたら、その段階で見ている側にわざわざ障害がそこにありますと宣伝してしまうことになる。たしかに、右手が使えないなら不便かもしれない。でも、だとしたら右手を使うような演技を舞台でしなければいいだけの話で、じっとしていられないでうろうろしてしまう生徒がいたら、そういうシーンをつくってしまえばいい。フリースクールの生徒ができなかったことを大学生がフォローする。そういう舞台をつくりたいわけではないのです。障害があったら舞台をつくれないうのか。不登校だと舞台に出てはいけないのか。そんなことはないはず。障害があろうがなかろうが、不登校だろうが不登校じゃなかろうが、そんなことに関係なく舞台はつくれるはず。そういう舞台をともにつくっていききたい。」

講座終わりに今日のワークに参加できなかった6bさんのことが気になったので、同級生の6dさんに話を聞いてみた。6dさんは大丈夫だろうといていた。「もし本当に

この場にすることが辛いようなら、やりようはあるので遠慮しないでいってほしいと6bさんに伝えてください。」そう6dさんをお願いした。

今日1日でだいぶ学生さんの名前を覚えることができた。

【ワーク① 人の間をすれ違う】

5月10日の【ワーク②】に同じ。

すれ違うときにハイタッチをしたり、人差し指どうしをあわせたりしながら会場を歩き回った。

【ワーク② あいさつ「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」】

5月10日【ワーク④】「拍をうつ・拍を合わせる」のバリエーション。方向を決めずに会場内を歩く。対面から来る人がいたらその人と「おはよう」とあいさつをかわす。そのとき、相手と「おはよう」の「お」の音から「う」の音までしっかり合うようにするにはどうするか、考えながらお互いあいさつをかわす。この間、しゃべってはいけない。あいさつが合わせやすい人、合わせにくい人の違いはどこにあるのか、注意しながら「おはよう」の音を合わせてみる。ひととおりますんだら、次は合わせるあいさつを「こんにちは」にする。このときも「こんにちは」の「こ」の音から「は」の音までがしっかり合うようにする。さらにあいさつを「こんばんは」にしてやってみる。ここまででいったんワークをやめて、あいさつを合わせるためには何が必要かを参加者にきいてみる。参加者から合わせるための工夫をきいたあと、ふたたびワークに戻る。最後に、あいさつを「おはよう」にするのか「こんにちは」にするのか「こんばんは」にするのかを決めないで合わせるようににする。合うようにするには、どうすればいいか、どのような手段をもちいてもよいので合わせるように指示する。

途中から半分にグループ分けをしてワークをする側と見学する側に分かれた。一方の壁側に見学者がいて、その人たちの前に大きく空間がひらけた。見られていると意識したためだろう。

【ワーク③ 全身入力】

5月10日の【ワーク⑤】に同じ。

今日も最後はかなりヘビーな話になってしまった。なので、身体の緊張だけでもいいとおこうと思いこのワークを選択した。

【埼玉大学生の記述から】

輪になって座ることへの言及をしている学生がいた。「教室に入ってすぐ前にあるロッカーの前。すっかり自

分の場所が定着している。なんとなく場所がいつの間にやら出来ていた。人間はその空間で安心出来る場所を無意識に探すものなのだろうか。」

【ワーク①】

指示の間違いに言及している学生が意外と多い。「小林先生が「中指と中指を合わせる」ようにと言いながら、模範として人差し指を出している。「中指？」と思いながら自分の中指を出してみる。何かおかしい気がする。すると、小林先生は人差し指と訂正した。」細部にまで注意を払ってその場にいてくれる証だろう。

【ワーク②】

どうやって合図なしにあいさつのことばを合わせるかというときに、なかなかおもしろいことをする学生さんがいた。「先生が合わせるための工夫をみんなに聞かけたとき、大きな声を出して、自分がおはようと言う人だとアピールするという意見や、時計を指さし今はお昼だと伝え、こんにちと言わせるという意見がでた。」意外な発想があっっておもしろかった。また、見られることで空間のありようが変わってくることに言及している学生もいた。「見ている側は右寄りにならないようになるべく散らばり、全体を使えるようにしたはずだが、ワークをしている人達は多少中央まで広がったくらいで、やはり左に寄っていた気がした。人が見ている、いるというだけで空間は全く異なってくることを体験したことも印象的だった。」

【ワーク③】

このエピソードで 7j さんが誰なのか覚えた。「私は手を投げ出していた。疲れていたのと、眠いのでまったく力をいれていなかった。その前に小林先生に「今日はぼーっとしてるね。いつもここらへんを見てる。」と頭のほうを指して言われた。その時も言ったが、その日はレポートを書くために一時間しか寝ていなくて、相当眠かった。先生の言っていた通り、上の空のことが多かった。レポートはためないようにしよう。小林先生は指示をしながらも、私たちの様子がよく見えているようだ。」

【小林の話聞いて】

ワークの終わりに話したことについて、ある学生が取り上げてくれていた。「最近障害を持った方もいわゆる普通学級に入るケースが多いんだよ、と現職の養護教諭の先生からお聞きして、私は、そういった子には特別な手助けが必要なのかな、と考えてしまいました。しかし、今回小林先生のお話を聞いて、はっとしました。「学生が、障害を持った方、体が不自由な方の手助けをして、舞台を造る……」まさに私が今まで考えていたことそのものでした。心の中を見透かされているような気分になりました。実際にこの授業で彩星の方と関わってみて、一人ひとりのことをよく知らないし、どんな事情を持っているのか

も全く分からないから、毎回の活動で、私たち埼大生が手助けを行ってきたこともないし、小林先生から今回、「この中には障害を持った方も、体が不自由な方も、不登校の方もいる」というお話を聞いて、以前から「障害」についてのお話が多かったから、何となく感じていたけれど、初めて、そうなんだ！という気持ちを持ちました。私の注意力がなさすぎるせいか、片手が使えない子については、全く気付きもしませんでした。振り返ってみると、それぞれの活動を、みんなで行って、楽しい時はみんなで笑って、上手くいかない時はみんなで悩んできたし、何か特別な条件をつけたこともありません。私が今まで思ってきたように、初めから、この子は障害を持っているから、体が不自由であるから、助けてあげなくては……と、まるで特別扱いをするかのような気持ちを持ってしまうと、上手く関われなかったり、同じ活動をする際に、特別な接し方をしてしまったということがある可能性があるかもしれない、と感じました。」

このような感想を抱いてくれることは非常にうれしい。しかし、うれしいと思う反面、「普通」や「障害」ということばにこだわっているのは、結局、自分自身なのかも知れないとも思う。自分があえてそういう単語を取り上げることで、「問題」をつくりあげているのではないか。そう思うと、ちょっと落ち込んだ。

■6月9日(土)

- ・ 彩星学舎内見学
- ・ 好き嫌いの地図
- ・ すずめのお宿
- ・ 声の色、声のカタチ
- ・ 朗読「林檎の木の下で」
(対面で朗読→2 チームに分かれて輪読)
- ・ 斉読（音楽に合わせて）
- ・ 懇親会

埼大生が彩星学舎を訪れる。彩星学舎の生徒にしてみれば、今までは埼玉大学というアウェーの活動であったが、今日はホームでの活動になる。今日は「声」に関するワークショップをいくつかおこなう予定でいた。約1ヵ月後に発表会を控えているので、そろそろ発声をはじめの時期かなと考えてのことだった。ゲームをする。「好き／嫌いの地図」、「すずめのお宿」、「声の色、声の形」。声の形、声の向きを考える。「林檎の木の下で」を朗読する。声を発する側のイメージの違いがどのように受け手に伝わるのか。全員で「林檎の木の下で」を斉読する。

【ワーク① 彩星学舎見学】

4つのグループに分かれて彩星学舎内を探索。彩星学舎の生徒が埼玉大学の学生を案内する。ボランティアで参

加している他大学の学生にも参加してもらう。どういう順番で回ってもいいが、15 分ほどでひとまわりして戻ってくる。

彩星学舎の生徒が埼玉大学の学生を案内する。今までのワークでは参加者同士ほとんど話をしていなかったのに、今日はじめてお互いの声を聞くことになった。散策している間、私は庄司先生と打ち合わせをした。

【ワーク② 好き嫌いの地図】

何が好きかで仲間を集めるワーク。進行役は全体に向かってお題を提示する。参加者は提示されたお題に対して自分の好みとあう参加者を探し、グループを形成する。グループ内でお題に対して、なぜこのグループが形成されたのかを考えてみる。進行は各グループで話し合われた結果を全体化する。進行が用意するお題にはたとえば次のようなものがある。「血液型」、「星座」、「生まれた月」、「海が好きか、山が好きか」、「好きな色」、「好きなスポーツ」、「好きな寿司ネタ」など。「血液型」や「星座」などは完全に分かれることができる。しかし、好きかどうかを問う場合は、「嫌い」という選択肢もある。その場合は、「嫌い」でひとつのグループとみなす。グループ内での話し合いは、「なぜ好きか」など「なぜ」を問うことはしない。たとえば「好きな色」では「○○色のつくもので一番好きなもの」を連想してあげてもらう。グループ内で統一見解をつくるのではなく、言いつ放しでいいような問いかけにする。「血液型」や「星座」などでは、「得したこと、損したこと」などを聞くとおもしろい。全体化する際は、できるだけ少数派の意見を取り上げる。ひとりであることに価値を認める。仲間集めのときには、できるだけ大きな声を出して仲間を集める。参加に関しては強制しない。盛り上がっているころあいでワークは切り上げる。終わるタイミングを間違えるとせっかく盛り上がっていた場の集中が散漫になってしまうので注意する。

与えられたお題を中心にグループを作るワーク。いくつかお題を出しているうちに、なんとなくグループ化されないことを目指す人々がいることがわかってくる。「星座」や「血液型」などは、グループ内での会話が弾んでいた。「その星座の生まれの人は人からどのように言われているか」や「その血液型で得したこと／損したこと」といった質問は、全体が盛り上がった。「好きな色」も「その色のものの、何を想像したのか」と質問した。「なぜ」を問うとなかなか答えが出てこないが、言いつ放しにできる質問だと口も軽くなる。特徴的な答えの人をピックアップして全体の前で取り上げると、その人がそのイメージとともにうっすら参加者に認識される。庄司先生の「アオミドリ」へのこだわりが場を盛り上げてくれた。

【ワーク③ すずめのお宿】

5月10日の【ワーク②】に同じ。

今回は【ワーク④】へつなげるためのワークとしてうまく機能させることができた。

【ワーク④ 声の色、声のカタチ】

「すずめのお宿」で3人1組になっている状態からワークをはじめる。お宿のふたりがアーチ上に組んだ手を顔の前まで下ろし水平にする。向かい合ったふたりが両手を前に突き出し、ふたりのちょうど真ん中あたりで手のひらを合わせる。はじめの合図とともに、ちょうどふたりの真ん中でピタリと声が合うように「あー」と発声する。すずめ役の人は頭上で交錯する声が確かに真ん中で合っているかどうかを聞く。終わりの合図で声が合っていたかどうかをすずめ役の人がお宿役の人に伝える。合っていなかった場合はどのように合っていなかったのかを具体的に伝える。順番を交代して、全員が声の合う様子を聞く。進行役は一回ごとに合っていたかどうかを全体化しながら聞く。声が合っていなかった場合、多くの人にはどのように合っていなかったかを身振りを交えながら示そうとする。そのときの手の動きや、それを表すのに使われることばを取り上げる。特に手の形はそのまま声がどのようにすれ違っていたのかをダイレクトに表している場合が多い。この段階で、声が視覚化されているということを指摘する。その後、グループのなかで交代するたびごとに、聞いているすずめ役の人にいくつか質問を投げかけてみる。「その声に色はありましたか。あるとしたら何色でしたか。」「その声は柔らかいですか。硬いですか。」「その声には温度がありますか。暖かいですが、冷たいですか。」「その声はあなたにとって心地よいですか、不快ですか。」「何か目に浮かぶ光景はありますか。」3人がひととおり聞き役になったところで、再度、「すずめのお宿」ゲームによりグループを新しくする。新しいグループのなかでもう一度同じワークをして、そこに違いがあるかどうか確かめてみる。

周りのグループと声が混じってしまうのではないかとこの心配はあった。しかし、去年よりも人口の密度が低いのか、また、会場が彩星学舎だったこともあってか、なんとかグループ内で聞き取ることができたようだ。

【ワーク⑤ 朗読】

「林檎の木の下で」という歌の歌詞を全員で朗読する。全体をふたつのグループにわけ、それぞれが一行ずつに並ぶ。お互いの列が向かい合って並ぶ。両者の間は3～4m程度の間隔をあける。一方の一行が発声しているとき

は、もう一方の一行は聞き役にまわる。「対面している相手にちょうど触れる程度の声で」「対面している相手を自分の声で思い切り押すつもりで」「アニメ『風の谷のナウシカ』に出てくるオームの、口からでてくる金色の触覚が相手に触れるような感覚で」など、朗読の文面とは関係ないイメージによって発声してみる。聞いている側は、どのようなイメージでそれを受け取ったか、フィードバックさせる。

2 列に分かれてというのはどうもうまくなかったかもしれない。全体的に声が分散してしまい、散漫になってしまった。

【ワーク⑥斉読】

「林檎の木の下で」という歌を BGM にして、歌の歌詞を全員で朗読する。読み出しのタイミングは小林が合図する。それぞれの行の頭の音がそろうことにもっとも注意を払う。誰かがいったあとにいうのではなく、自分の声出しが周りの人の声出しのタイミングとぴったり重なるように神経を集中させる。朗読の読み終わりに「林檎の木の下で」と3回繰り返す。これも誰かのあとではなく、自分の声出しのタイミングを周りとはぴったり合わせる。声の対象は客席側にいる小林目がけて声を出す。

とにかく今日の段階で何かできたという印象を残して終わりにしたかった。その意味でいえば、最後の斉読の音がピシッとそろって終わったので、参加者はそれなりに充足感を感じることができたのではないかと思う。

【埼玉大学生の記述から】

【ワーク①】

声についてレポートしてくださいという指定だったので、このことに触れている人はあまりいなかった。

「時間になり、円になった。初めに、4 つのグループに別れて、そのグループの彩星の子に学舎の建物内を案内してもらった。」詳細に案内の様子を描写してくれた人もいた。

【ワーク②】

ワークを通してお互いの距離が多少縮まったのではないかと思う。「誕生月で分かれる。3 月は私ともう一人しかなくて驚いた。相手の子が、自分の弟と同じ年でなんだか嬉しくなった。」また、大きな声を出すことに恥ずかしさを感じると記述する人も何人かいた。「なかなか自分から大きな声が出せなかったが、最後の方の好きな色や、好きなネタになると大きな声で身振り付きで人を呼べるようになる。」

【ワーク③】

導入だったためか、あるいは以前にやっていたためか、

詳細に言及している人は少なかった。

【ワーク④】

具体的に感じられた形を記述してくれるレポートが目立った。「やはり男の子の声の方が聞きやすかったせいかな、真ん中にまで男の声は届いているが、女の子の声は真ん中より手前で止まっているような感覚がした。声の形と言うか、声の空気のようなものを感じた。それを2人に伝える。」、「二人が声を発すると、私には声の形が見えるようだった。左側からは尖っているが、先っぽは丸いものがちょうど真ん中まで来ているように見え、右側からは男性を中心に丸く音が分散し、真ん中まで届いていないように見えた。」、「一人の声は一つとまっすぐ聞こえ、もう一人の声は平らかなものが優しく聞こえた。」、「どの人もみんな手を使って説明している。人によっては、片方の手が人差し指で、もう片方の手がグーを少し開いた形で、何かを表している。普通に手を使って話していた。」など。反対に「他の声を聞いていた人が小林先生に指されてコメントしていたように、「鋭い」とか「ビーム光線のように」とかという表現を聞いても、私はそのような声の形を体験することができなかった。声の形、形、形……ばかり考えていると、耳に入ってくる声は自分から遠ざかっていった気がした。」と記述した人もいた。また、指示の出し方に言及しているレポートもあった。「前の人と長い間目を合わせるのが少し恥ずかしく、目のやり場に困っていると、小林先生が2人の間に声をぶつける場所を示してくれた。」

【休憩】

講座のはじまる前や終わったあと、休憩時間などにもドラマはある。「休憩。いつも写真を撮ってる子に撮って！と言うと、いつも通り撮ってくれるだけでなく、撮った写真を見せてくれた。いつも見せてと言っても見せてくれなかったのが嬉しかった」こうした時間があるとうれしい。

【ワーク⑤】

声を形として認識できたという記述は多かった。「その中で小林先生は声の出し方や朗読のしかたに関していろいろな指示を出した。頭の音が揃うように、詞を読んでいる思いを込めて、できる限り速く、針のようになど様々であった。それらは指示通りにいっていないものも多々あったが、それぞれが明らかに違うものに変っていると感じた。ここで「声は形を持っている」という小林先生の言葉を少し実感した気がする。」「二倍の速さで」といわれての朗読は、なんだか速すぎて伝わってこない。声があたまに入らず、ただみみの周りで止まっている。「針で刺すように」と言われるとなんか冷たい声のオーラが伝わって、不快であった。何回かこのような声出しをする中で先生の要求で声の性質がどんどん変わった。」

【ワーク⑥】

何でもいいが朗読劇をするのだというイメージを少しでも持ってほしかった。「曲が終って、3 回「林檎の木の下で」と繰り返した時は、声が向こう側に行き切って、達成感を感じた。曲が流れると、みんな自然に口ずさんでいて、和やかな雰囲気が流れ、ワークが始まると一気に集中し一つの塊になる。」、「どんどん声が大きくなる。力が入る。さっきまでの眠気が吹っ飛ぶ。声もどんどん合ってくる。みんなが一つになっているのを感じる。みんなの顔は全く見えず、声しか聞こえないのに後ろから後押しされている感じ。」などの記述がみられる。その意味では今日のワークは成功だった。

■6月14日(木)

前半のまとめのレポートを配布。後半のメインは舞台創りにあることを確認する。

舞台で使用するテキストを作成するため、個々に課題を課す。課題は2つ。1つは「私の一番古い記憶」を300字程度にまとめる。もう1つは「私の勝負服」を同じく300字程度にまとめてもらう。電子メールで彩星学舎宛てに送ってもらうことを確認する。締め切りはこれまでどおり日曜日までとした。

今年の年間学習テーマは衣食住の「衣」だった。そこで、今年のテーマとも関連させてテキストを考えてみた。まず、宮沢賢治の「注文の多い料理店」をメインに据える。都会の猟師たちが山猫にだまされて自分の着物を1枚ずつ脱いでいくというシーンがあるので丁度いい。このテキストを4つのパートに分割する。「猟師が異界に迷い込んでしまうシーン」、「猟師が料理店に入り、山猫の注文とも知らず注文どおり服を脱いでいくシーン」、「山猫だとわかり大急ぎで逃げ出そうとするシーン」、「自分たちが連れてきた猟犬に助けられるが、恐怖にゆがんだ顔が元に戻らなくなったシーン」。以上の4シーンだ。この4シーンは輪速読で朗読する。このシーンの合間に、いくつか朗読のテキストを用意して輪速読とのメリハリをつける。挿入するテキストの候補は何篇かあるが、とりあえず、「林檎の木の下で」は入れることにした。

「私の勝負服」という課題は、まさに自分がここの一番というときに着用する衣服を、そのエピソードも含めて紹介してもらうというものだった。提出されたテキストを使って、ショートコント的なシーンが作れればと思う。もうひとつの課題は、「私の一番古い記憶」というものだった。自分自身が何者であるかを考える。「あなたは何者ですか」と問われたときに、いったいなんと答えるだろうか。「大学生です」や、「フリースクールの生徒です」、「吹奏楽部に所属しています」などの属性をもって自分が何者かを答えるのか。あるいは「鉄道が好きです」、「アニ

メにはまっています」といった好みを答えることもあるだろう。「〇〇家の長男です」と答える場合もあるだろうし、「緊張すると頭をかく癖があります」と答える場合もある。しかし、こうした回答はすべて事後的に身につけてきたものであるともいえる。では、こうした「自分について語る語り」はいつごろから始まったのだろうか。もしも「自分について語る語り」が後から身につけたものとするならば、一番古くに身につけた語りはいったいどのようなものなのか。「衣」との関連でいえば、多少強引だが「身につけたもの」つながりで、こうした課題を設定した。

講座のはじめにテキストをつくるための課題と称して、多少長めに話をした。その際、自分の一番古い記憶について話をさせてもらった。私の一番古い記憶は、「親戚の家のスイカ畑で、祖母に持ち帰るといって一番大きなスイカを運んできた」という記憶だった。しかし、後年、この記憶が少しおかしい記憶だということに気がついた。なぜおかしいのかというと、その記憶の映像のなかに自分自身がスイカをもって登場してくるからだった。それは多分に、私以外の人によってこの場面が繰り返し語られてきたからではないかと、今では思っている。その畑にいた親戚の叔父や私の母親は、何度となくこの場面を私に語ってくれていた。しかも、それはきまって「私がおばあちゃん子だった」という話とセットだった。そして、気がつけば、今、たしかに自分は「おばあちゃん子だった」なのだ。しかし、だとすれば、私はこの繰り返し語られるスイカ畑のシーンとともに、おばあちゃん子であるという属性を身につけていったということになる。

そのようなエピソードを語りつつ、自分の一番古い記憶について300次程度でまとめてくよう願っていた。

そして、今日から朗読の練習に入ることにした。

まず、前回の彩星学舎訪問のときにおこなった声のワークの続きをおこなった。イメージによって声がどのように違ってくるのか。声の物理的な側面に気づくワークが前回のワークでは不十分だった。そこで今日は、全体を男性と女性にわけてイメージにより声がどのように変わってくるのかというワークをおこなった。まずは会場いっぱい広がる女性の輪をつくった。その輪のなかに男性陣が入って座った。さらにその輪の中心に私が立った。女性陣は輪の中心にいる私の方を向いて座った。男性陣はできるだけ私に近づくようにして円の外側を向く形で座った。男性陣にはまず、目をつぶってもらい、女性が発する声を聞いてもらった。出す声は「アー」という音のロングトーンだったが、それをあるイメージとともに発声してもらうことにした。「声で私を押すように」、「ちょうど声が私まで触れるように」、「声で私を突き刺してその声が円の反対側にいる相手に届くように」、「風の谷

のナウシカに出てくるオームの触角のように」,「真ん中にいるひとをやさしく上にむかって押し上げるように」など,いくつかイメージを提示した。聞いていた男性陣には,実際のどのように聞こえたかを聞いてみた。「強いところと弱いところがあった」,「とがっていて痛い感じがした」などの感想があがった。立場を変えて,男性が発生する側,女性が聞く側になった。男性の声の特性を聞いてみると「押すようにいうときは怖かった」,「灰色のような感じだった。」「海を連想した。」などがあがった。

【提出された課題について】

「私の一番古い記憶」はゆっくり読むと1分程度になってしまう。これではテキストとして構成するにはちょっと長い気がした。また,「私の勝負服」の方は,どのような状況が勝負服を着る場面かというレポートが多かった。具体的にどのような形状のものなのかが知りたかったので,次回,もう一度提出してもらうことにした。

■6月21日(木)

課題の修正を指示する。300字は字数としては多すぎたので,「私の一番古い記憶」を100字前後にまとめなおしてもらう。「私の勝負服」も,どういう状況で使用するのかという設定の方に記述がさかれていたので,どのような形状のものなのかを具体的に記述してもらうことにした。

輪読する人を募集して,輪読にそって合いの手をいれてみた。鏡が張り巡らされている壁面をバックに朗読するメンバーが並んだ。それ以外の人たちは朗読メンバーの対面にまわった。ちょうど客席の位置になる。私も客席側にいたが,その他の人たちは私よりもさらに後ろの客席側に控えた。リズムを重視しつつ輪読をはじめた。

宮沢賢治の童話の世界では風がひとつの重要な要素だった。異界に入り込む境に風が吹いてくる。異界からこちら側の世界に戻ってくるときに風が吹いてくる。彩星学舎では朗読のエース格であるSJちゃんとSBが風の音を担当していた。重要な役割だった。ぜひともここに大学生にも入ってもらいたかった。そこで「いつも眠そう」ということで最近名前を覚えてしまった7jさんを指名した。

■6月27日(水) テキストの構成

「私の勝負服」というタイトルのショートコント的なテキストを作成する。

「勝負します」というリズムを刻む台詞のあとに,提出された課題の文章を挿入していく。提出された課題文は100字前後と長かったので,そのなかから特徴的な単語を取り出し,簡潔な文章にした。

高校の同窓会.....何を着て行こうか。今までは制服の毎日だったから,どれを着ても友人同士お互いに新鮮だろうが,取えて勝負服とするならば,ワンピースだろうか。ワンピースは男性が着ることはなく,女性が着る服で,自分が女性であることを視覚的に訴えることができるはずだ。そしてそのワンピースの色,デザインで自分の好みも表すこともできる。つまり,一着に多くの要素を詰め込むことができるのだ。「女子高の同窓会だから女性しかいない中で,自分らしさを表したい。」そんな思いを込めて,黒色で腰にリボンが付いたワンピースを着て,自分が女性であること,黒色やリボンが好きであることをアピールできるワンピースを勝負服にしよう。

上記テキストを「勝負します」ではさまれる2~3行のテキストにする。

勝負します。

半袖で全部黒色です。

丈はひざより少し短めです。

腰の高さにセンターリボンが付いています。

ワンピースです。

勝負します。

……別の人のテキストが挿入されて,以下同じように続く。この要領で提出してもらった「私の勝負服」をテキスト化した。

■6月28日(木)の講座

「私の勝負服」をテキスト構成。実際に声に出して呼んでみる。とにかくひとつでもいいからシーンをつくりあげてしまいたかった。国語科の3人を指名して「私の勝負服」を朗読してもらうことにした。5bくん,5dくん,5fくんの国語科3年メンバーだった。もうこの辺になってくると,一種のかけだった。うまくいけば,これ以降の稽古の核になっていく。しかし,外してしまうと,もしかしたらそれ以降の稽古は収拾がつかなくなってしまうかもしれない。

朗読は,輪速読にちかい要領で朗読することに決めていた。テキストを渡して,さっそく朗読をはじめてもらった。はじめはとにかくひとり1行ずつのまわし読みだった。そんなに大きな声を出さなくてもよいが,前の人の読み終わりにちょうど自分の台詞がかぶるように朗読してほしいと指示を出した。はじめての朗読にしては,要領よく読めていた。「私の勝負服」は,提出者に女性が多かったせいか,「ワンピース」「スカート」といった単語が多かった。それを少々あつくるしい男性が,とにかく勢いよく輪読していく。そのギャップに賭けてみたが,見事にその賭けは成功した。笑いをこらえる参加者たち,というか

実際笑い出している参加者もいた。「これはこれで、決まりだから。このメンバーで固定しようと思います。よろしくね。」という、参加者たちからは拍手が起こった。本人たちもまんざらではない様子だった。台詞を入れるタイミングなども含めて、少し稽古をつけた。

さらに、今日は「林檎の木の下で」を演奏する楽団のメンバーも決定した。以前から「林檎の木の下で」を挿入すると宣言していて、できれば楽器で演奏したい。そこで楽器が演奏できる人を募集した。そうしたところ、5c くん、6b さんがピアノを弾ける、5d くんがウッドベースを弾ける、7o さんがドラムを叩けることがわかった。たぶん、もっと楽器ができる人がいるのだろうが、遠慮してか手があがらなかった。

■6月30日（土）テキストの構成

カフカの『変身』*16をテキストとして挿入することにした。「私」はあるとき突然、なにが別のものに变化してしまう。そういう不安定なものだということを、テキストレベルで挿入しておきたかった。この辺は自分の趣味の領域だ。しかし、何人かにはソロで朗読をしてもらう予定だったので、こうしたテキストを増やしていく作業はどうしても必要だった。同様に、寺山修司の記憶について書かれている文章*17も挿入することにした。これは「私の一番古い記憶」のパートのはじめか終わりで使うつもりだ。

また、「私の勝負服」では「スカート」の話が多かったので、それにまつわるエピソードを挿入しようと考えていた。手元にあった衣服に関連する本*18のなかから、「アンドレ・クレージュ」について書かれているくだりをピックアップした。そこにはクレージュがミニスカートを創り出した場面がコミカルに描かれていた。これをやはり1行ごとに行わけして輪読できるようにテキスト化した。

宮沢賢治*19「雨ニモマケズ」、「春と修羅 序」、「風の又三郎」は彩星学舎の生徒と稽古をしているので、こちらはすでにテキストとして決まっていた。宮沢賢治の「青空のはてのはて」、「サキノハカという黒い花と一緒に」も使えるようだったら使いたかった。あとは、誰がどのテキストを朗読して、それをどの順番で並べていくかだけだった。それは次回の稽古の流れをみて決めようと思った。

■7月5日（木）の講座

泣いても笑ってももう次回が舞台発表だ。今日は輪読読のパートを決めたくて、一通り全員に朗読してもらう。全体を3つのグループに分けて、1グループずつ輪読してもらった。それぞれのグループで「注文の多い料理店」の各パートを練習する。

一番はじめに大きな声を出して朗読することに疑問をもっていた人もいたので、これまでどうしたものかと考えていた。あまり大きな声を出すことに抵抗のなさそうな人たちは早々にグループ化してテキストを渡してしまった。全体の朗読をどうしたものか。考えていても仕方がないと思い、今日は全員で朗読を試みることにした。まずは機械的に、名簿にそって3つのグループに分けた。3つのグループにはそれぞれ違ったパートのテキストを渡した。朗読をしていない人たちは、朗読しているグループの朗読を聞いてもらった。そして、私が指定したところで合いの手を入れてもらった。そんなに声を張らないでやっているせい、みんな思ったよりも声が出ている。合いの手になると彩星学舎の生徒の声も加わるのでさらに迫力が増す。リズムが出てくると次第に声も大きくなっていく。休憩をはさみつつ3つのパートそれぞれをつくりこんだ。

その最中にもそれぞれの声の色を聞いていた。「記憶の捏造」の朗読を7kさん、7qさんのふたりにお願いした。声に透明感があり、静かないいシーンになるのではと思った。また、「アンドレ・クレージュ」の朗読を7bさん、7cさん、7gさん、7nさん、7pさんをお願いした。テキストは渡して一度読んでもらった。7bさん 7cさんチームと、7gさん、7nさん、7pさんチームに分かれてもらった。朗読は力が抜けていてコミカルだった。変な関西弁とマッチしていた。この力の抜け具合が本番でできればいいのだなあと思った。しかし、なかなかそううまくいかないだろうとも思った。

楽団のメンバーは別室で「林檎の木の下で」の稽古をしてもらっていた。ダンス室に入ったのは講座の終了間際だった。最後に一度、全体の前で演奏を披露してもらう。ウッドブロック、アコーディオン、ウッドベース、鍵盤ハーモニカ、ボーカルという編成だった。短時間でよくまとめてくれていた。聞いていた他のメンバーから拍手が起こった。

稽古終了後、「私の勝負服」メンバーが残っていた。今日は時間内に稽古ができなかったので残ったようだ。稽古するとはなしにテキストを声に出していた。この時間以外にも自分たちだけで稽古していることはわかった。しかし、ちょっと内輪受け的になっているようにも感じられた。台詞の言い回しに自分たちだけがわかるようなニュアンスをつけて朗読していた。そのことが気になった。「ちょっと内輪のりになっていなだろうか。もっと知らない人に見られているという意識を持たないと、本番ではかなり浮いてしまうと思う。自分たちの気持ちいいリズムが、必ずしも観客にとっていいとは限らないからね。今の朗読だと観客を無視して自分たちだけ調子よくなってしまっているようにみえる。」楽器の演奏で舞台慣れしている5dくんはその辺がわかったみたいで納得してくれた。このメンバーは放っておいても大丈夫だと思った。

■7月6日(金)の稽古

SJくん,SBくんのふたりが「風の又三郎」の冒頭「どっどど どどうど どどうど どどう」の部分を読誦する。SJくん,SBくんのふたりに続けて全員が復唱する。4回繰り返しのあと,SBくんが「雨ニモマケズ」といい,全員がそれに続けて「雨ニモマケズ」という。さらにSBくんが「風ニモマケズ」といい,全員がそれに続けて「風ニモマケズ」という。そこから,SGくんがリーダーとなり,「そういうものに」というと,全員が続けて「そういうものに」といい,SGくんが「わたしはなりたい」というと,全員が続けて「わたしはなりたい」と続ける。さらに続けてSEさんが「なんといわれても」というと,全員が「なんといわれても」と続ける。SEせんさんが「まあ,知ったことではありません^{*20}」という。全員がそれに続く。とにかくこのパートをひたすら繰り返し稽古した。ここが読誦の肝だ。そう思いながら,2時間,このパートだけを徹底して稽古した。

■7月7日(土)の講座

埼玉大学生が彩星学舎を訪れる回の2回目となった。今日は本番に向けて一気にシーンを構成し,大まかな流れを作っておかなくてはならない日だ。しかし,この日はスタートからつまづいてしまった。講座がはじまる時間までに彩星学舎の生徒だけでその場の雰囲気を本番稽古モードにもっていくつもりだった。とにかく今日を含めてあと稽古できる日が2日しかなく,稽古のはじまりの雰囲気は非常に重要だった。しかし,実際のはじまりはなんとなくズルズルとはじまる結果となった。今日は午後の3時半まで小学生のための講座があった。さらに,その間私は新しいボランティアのための研修をおこなっていた。講座のはじめを緊張した雰囲気で始めようとしていた私は,研修の時間が延びてしまったことで切り替えが行かないまま稽古に突入した。加えて,それまでの小学生の講座からの切り替えもうまくいかず,なんとなく散漫な空気のまま稽古の時間になってしまった。

しかし,とりあえず昨日の午後に彩星学舎の生徒だけで練習したところを中心に,稽古を開始することにした。まず,楽隊のメンバーに別室に移ってもらい,「林檎の木の下で」の練習をしてもらう。前回の稽古で独唱が決まった7oさんだったが,キーがあわず声がなかなかでないという報告を受けていたので,パーカッションはどうかと薦めてみた。もともとドラムをたたきたいといっていたので薦めてみたのだが,本人は歌を歌う方向で考えているといってきた。もうしばらく粘ってみることにした。

次に読誦本体の稽古に取り掛かった。「風の又三郎」の冒頭「どっどど どどうど どどうど どどう」の部

分を読誦する。埼玉大学生の7jさんがいないので,彩星学舎のSJくん,SBくんのふたりに続けて全員が復唱する。4回繰り返しのあと,SBくんが「雨ニモマケズ」といい,全員がそれに続けて「雨ニモマケズ」という。さらにSBくんが「風ニモマケズ」といい,全員がそれに続けて「風ニモマケズ」という。そこから,SGくんがリーダーとなり,「そういうものに」というと,全員が続けて「そういうものに」といい,SGくんが「わたしはなりたい」というと,全員が続けて「わたしはなりたい」と続ける。彩星学舎の生徒の声が出ているせいか,埼玉大学生の声も徐々に出てくる。この辺は,前日に稽古をしてあったので,彩星学舎の生徒も自信をもって声を出してくれる。読誦の核になる人たちがしっかり声を出してくれることによって,あとから段取りを追いかけしていく埼玉大学生たちも気兼ねなく声を出すことができた。稽古入の部分で入り損ねた雰囲気を,この読誦の練習によってなんとか取り戻せたのではないかなと思う。

彩星学舎で読誦のリードを担当したうちのひとり,SGくんは,1年のときも2年のときも埼玉大学での舞台には出演している。しかし,彩星学舎の卒業イベントでつくる舞台には2年連続で出演を見送っている。たぶん,彼のなかでは人の前に立つということが大きなプレッシャーになっているのではないかなと思う。全員のなかの一人という形では参加できるものの,あるシーンをまるごと全部ひとりで引き受けなければならない場面になると緊張してしまい何もできなくなってしまう。「漢字が読めなかったらどうしよう」,「区切るところを間違えたらどうしよう」という思いも強く,読誦するという行為自体も苦手のようだった。だから,ひとりずつのシーンがある卒業イベントは出演を見送ってきたという経緯がある。そのわりに,人と違ったかたちでその場に関わることにこだわるような傾向もあった。卒業イベントでは,彩星学舎関連グッズの売り子というポジションを与えられ,生き活きとその役割をこなしていた。

しかし,そんな彼も3年生になってから大きく変化してきたように思う。3年生の自覚というか,自分たちがしっかりやらなければという思いが強くなってきたのではないかなと思う。それは,舞台に向けた稽古への参加の度合いからも判断できた。それまでの2年間は,あまり気分が乗らないとわざと講座の時間が終わるころに彩星学舎にやってきた。あまり追い込んでほしい,参加しなかったことに関しては一切不問にしてきた。それが,今年になって,参加する回数が増えた。読誦にも参加するようになった。それまでの3年生がそうしてきたように,彼も自分がまずやってみることで他の生徒を牽引していこうとしていた。彩星学舎では3年目という時間が1つの区切りになっているように思う。3年目の生徒が読誦の稽古にしる,

その他さまざまな活動にしる、中心的な役割を担うようになっている。

そうした彩星学舎の生徒に引っ張られるように朗読の稽古も進んだ。続けて、後半のパートの稽古に入る。仮の構成表にしたがって、後半部分をとにかく創ってしまおう考えた。どのように朗読の落ちがつくのか、そこまでにはどのような流れがあるのかということがわかれば、理解先行型の大学生たちもやりやすいのではないかと思ったからだ。しかし、輪速読をはじめた途端にまた稽古場の雰囲気は失速してしまう。前回の稽古で暫定的に決めた輪速読のメンバーで輪読をしてもらったのだが、前回のように勢いが無い。当たり前なことだが、前回は稽古をつけていくなかで、だんだん声も出るようになっていった。そこで今回も声がよく出ていたそのイメージで、はじめからガンガン声が出ることを期待して稽古をはじめた。だが、期待した通りの声はそう簡単に出るわけではなかった。稽古した量が少ない分、声を出す感覚はすぐに前の状態に戻ってしまう。息を合わせるタイミングや声の向かう対象の設定、声の勢いなどの感覚も同じで、それらはすべて前回の稽古前の状態に戻ってしまっていた。稽古を指揮する側は前回の一番よくできていたイメージで稽古を始めるが、実際に稽古をする側の参加メンバーは前回の稽古をする前の状態からのスタートとなる。このギャップにあらためて気づかされる。当然、うまく輪読が回っていかない感覚は伝わる。うまく回っていないという雰囲気が蔓延し出すと、さらに大学生の声が出にくくなる。こうした悪循環が稽古場に広がってしまった。この講座は、自分が率先して舞台を創ろうと思って集まったメンバーばかりではない。選択必修という講座の性格から空いている時間にたまたま入れたにすぎないという人もいる。友だちが取るから私もという選択した人もいる。自分が舞台を支えているという自覚が本来的にはない人たちの間に、「ほんとうに大丈夫だろうか」という不信感が稽古場に広がり始めた。急ごしらえの集団だけに、こうした不信感の蔓延は一気に舞台への勢いを失わせた。

あまり稽古も進まないまま 1 時間が経過してしまう。休憩を 10 分入れることにした。楽隊のメンバーにも一度、稽古場に戻ってもらうことにする。停滞していることはわかっているが、「全体の流れを大まかに理解するための段取り稽古には、こうした停滞感が必ずつきまとうもの」と自分にいいきかせて、再度、輪速読の稽古に入る。「アンドレ・クレージュ」の掛け合い台詞も、部分的にはおもしろいところは見えるのだが、両者の息がなかなか合わない。稽古をしたいと思っても、ここだけに時間をとるわけにもいかず、次のシーンへ。「わたしの一番古い記憶」、「記憶の捏造」と続くシーンも、どんどん声が出なくなっていっ

てしまう。合奏や合唱にしても、ただなんとなく演奏して歌っているだけで、いっこうに気が入ってこない。いっぺん歯車がかみ合わなくなった稽古場は、集中力を欠く散漫な状態のまま、あっという間に終了の時間を迎えてしまった。この間、稽古らしい稽古ができないまま、稽古終了の時間となった。

とにかく、このままではどうにもならないと思い、彩星学舎のメンバーに全員舞台側に出てもらおう。埼玉大学生には客席側に移ってもらった。昨日練習したことがほとんど発揮されないまま終わるのでは、彩星メンバーは浮かばれないと思い、せめて昨日練習したところだけでも発表しようと思った。それを見て、埼玉大学の学生たちは何を感じるのだろうか。深呼吸をする。3 秒吸って、2 秒息を保持し、5 秒かけて息を吐き出す。1 分程度繰り返す。声の対象を確認する。対象は稽古場の一番後方にある時計。全体が落ち着いたところで、はじめの合図を送る。SB さんの「雨ニモマケズ」という声が発せられる。彩星学舎のメンバーがあとに続く。続けて SB さんが「風ニモマケズ」という。彩星学舎のメンバーが繰り返す。SG さんの「そういうものに」が間髪要れず続くと、それに合わせて全員で「そういうものに」という。SG さんの「わたしはになりたい」に合わせて、全員が「わたしはになりたい」という。そして、SE さんが「一生懸命やっていれば、～まあ、何といわれようと、私の知ったことではありません」というと、続けて SE さんが「何といわれても」という。それに続けて全員が「何といわれても」と続き、SE さんが「まあ、私の知ったことではありません」というと、全員がそれに続けて「まあ、私の知ったことではありません」という。声に勢いがあり、昨日練習したことを全部そこに出そうとする姿勢が伝わってきた。SB くんは全身に力が入って震えていた。SG くんは普段なかなか出ない声を張り上げていた。SE さんは練習した分を全部出した。SD さんは目を皿のようにしていた。

時間にすれば 1 分程度の朗読だった。しかし、自分のなかでここが今回の舞台のベースだと再認識できた。とりあえず、昨日彩星学舎で稽古したことはすべて出し切った。

今期の稽古ではいままではいなくらい私自身が学生に向かってしゃべってしまっている。「まずは体験すること」が重要だと考えている私の稽古の進め方としてはかなり特異な稽古の進め方だったと自覚している（学生にしてみれば、それでもぜんぜん説明が足りないようなのだが）。今回もこの朗読終わりで思わず発言をしてしまった。「これが彩星学舎のメンバーです。これまで自己紹介らしい自己紹介もせず、一緒に 3 ヶ月やってきました。どうでしょうか。ここにいるメンバーと私たちは何をしてきたのでしょうか。私たちはともに何を体験してきたの

でしょうか。「普通」じゃないといわれた。「障害」を抱えている。「不登校」を経験している。そういう人たちと、舞台を創ることはできないのでしょうか。あと稽古は一回です。もし稽古をする気がある人がいれば、このあとの懇親会の最中に、私は稽古に付き合います。」ということをつたえた。庄司先生がそれに続けてお話をされた。散漫な稽古を目の当たりにしたせいか、先生の声のトーンは普段よりもだいぶ暗かった。

稽古を終了し、懇親会がはじまった。しかし、何とか確かなシーンを創らなくてはと思い、「私の勝負服」のメンバーに声をかけた。「私の勝負服」メンバーも危機感があつたらしく、すぐに応じてくれた。懇親会の会場は1階だったが、急遽、稽古をしていた2階に戻った。「私の勝負服」の稽古を始める。2時間の稽古の中で今日は結局稽古できないでいた。稽古前の30分で練習するために30分前に来てもらっていたのだが、それも私の面談が長引きできないでしまっていた。そんな鬱憤もあってか、メンバーの3人はとても張り切っていた。リズムよく朗読ができていて、これまで稽古してきた感覚もそのまま保持してくれていたのも、早速、もう一步踏み込んだ稽古をすることができた。とにかく3人のなかでは一番5bくんが恥ずかしがっているのがわかった。一番大きな体でテキスト上「落ち」になっている部分を担当しているのだが、声を発するときに顔が上へ上へしてしまい全体が縮こまって見える。自分自身に集中してしまっていて、声が前にでてこない。

しかし、そこはチームワークのよさを利用した。観客に向かうときに意識が過剰に働くのなら、その観客に向かうという意識自体をそらすように勤めた。まずは、輪読の鉄則である隣の人の読み終わりに自分の台詞のはじめの音をかぶせることに集中してもらう。隣の5dくんの読み終わりにとにかく自分の台詞をかぶせていく。そうすることで、隣の5dくんと距離がじょじょに保たれるようになる。それは、どのような思いで取り組むのかという精神的な問題ではなく、どれだけ誤差なく台詞を入れることができるかという、非常に物理的な作業になる。5dくんと距離が保たれれば、5fくんも含めた3人の息が合うようになってくる。読み終わりのタイミングがきちんとかぶらないところはすぐに止めてもう一度やり直す。観念的にタイミングの問題を理解するのではなく、実際に身体でそのタイミングを掴むまで繰り返す。とにかく繰り返しこの稽古を行う。大学生は要領がよいので、大抵は10分程度でこのタイミングを思い出す。このタイミングがあいはいはじめるころには、自分だけに集中してしまっていた意識を、もう一度周囲との関係の中に連れ戻すことができる。そうすると、自然に声は自分のうちにとどまることをやめて、観客に向かってどっと押し出さ

れるようになる。

庄司先生がビデオで3人のアップを取ろうと1メートル以上近づいても、輪読のタイミングに集中することで全体の流れは途切れない。普通、あれだけ近くに寄られれば、カメラが意識されて朗読できなくなってもよさそうなものだが、意識が隣の人につながっているかぎりは何の問題もなかった。稽古の合間に5bくんが「庄司先生、近すぎます」といってその距離の近さに指摘していたが、一度輪読で隣の人につながってしまうとそれも笑い話の対象にしかならなかった。それほど集中力は増していた。

「サキノハカという黒い花と一緒に」を朗読するメンバーが途中から2階の稽古場に来て稽古を見学していた。「私の勝負服」の稽古がひと段落着くと、「私たちも稽古します」といつてくれた。うれしかった。構成の要になるシーンが増えることは大歓迎だが、それも稽古の量に比例することは確かだった。早速、稽古を始める。メンバーは5gくん、6dさん、3aさんだった。3aさんは2年前のこの講座の受講者で、それ以来、彩星学舎のボランティアとしてかかわってくれている。卒業イベントにもすでに2回出演してくれていた。すでに埼玉大学を卒業していたのだが、いっしょに舞台に立ちたいと参加してくれていた。稽古をしたいといってきただけのことはあつたかなりテンションが高く、すぐに大きな声が前にむかってどんと出てきた。しかし、気が入っている人には特有の問題というのもある。気が入っているにもかかわらず、稽古があまりなされていないときというのは、どうしても気持ちが焦りぎみになってしまう。そういう場合は、必ずといっていいほど、朗読が速くなる。びっくりするくらい全体のスピードが速くなってしまう。特に何人かで斉読をする場合など、声を合わせなければと思えば思うほど速くなる。単純に息継ぎをしなくなるのだ。単語と単語の頭文字を周囲の人としっかり合わせるように指示してある。しかも、誰かがいったあとであとから合わせるのではなく、声を出すまさにその瞬間に全員がぴったり合うようにといっているのも、速くなるのも無理はない。しかし、本来頭文字を合わそうとするのは、その文字の前で1ブレスおいてもらうためでもあった。その1ブレスが焦ってくると入らなくなってしまうのだ。特に3aさんにはそういう傾向が顕著に出ていた。

そこで、テキストに書き込みをしてもらうことにした。ブレスを入れて欲しい箇所の直前にスラッシュをひいて、スラッシュのところにoを書いてもらった。そして、スラッシュの部分にきたら心の中で小さく「マル」と読んで欲しいと頼んだ。こうすることで、テキストを一気に一息で読んでしまうことは物理的にむずかしくなる。「マル」のところで音の隙間ができる。隙間ができたことで、次の単語の頭文字を合わせるための緊張が生まれる。この音の隙間によって、

周囲の人の声を出す気配に敏感になれるだけの余裕が生まれる。この緊張が見えてくると、朗読している全員が有機的に関連しているように感じられてくる。

気が乗りすぎて速くなってしまおうというのは、それぞれがそれぞれ自分の世界に没入してしまい、周囲との関係がうまくとれなくなっている状態のことだといっている。自分自身がすでに朗読のスピードがあがっているのに、それを無理に周りと合わせようとする、余計に朗読のスピードは速くなる。こういう朗読は一度速くなり始めるとどこまでも速くなってしまふ。自分で全員のスピードをコントロールすることはできないのでさらに気が焦ってくる。焦れば焦るほど全体のスピードはさらに加速していく。相手の声をしっかりと受け止め、引き受けていく余裕がないためだ。だから、無理矢理にでもその隙間を作り出すほかなかった。

「マル」を入れてからは全体の朗読が落ち着いてきた。特に 6d さんがよくなった。それまでは、どうしても 3a さん、5g さんの朗読に押されスピードの速さに困惑していたが、スピードがコントロールされたことで声に鋭さが感じられるようになった。全体のアンサンブルが見えてくると実に迫力のあるシーンになっていった。

今日は最後の最後で何とか先が見えてきたような気がした。「私の勝負服」、「サキノハカという黒い花と一緒に」、「風の又三郎」、「雨ニモマケズ」、「ココ・シャネル」。とりあえず、舞台を構成するときに核となるシーンの形は見えてきた。最後はちょっと明るい気分で居残り稽古を終えることができた。

【雑感】

昨年までの稽古場との違い。とにかくテキストが置かれると彩星学舎の生徒がそれを持ち、朗読の練習を始めた。声の大きさは圧倒的なもので、それにつられるように埼玉大学生の声が出てくるようになった。しかし、今年度はそうした率先してテキストを朗読する生徒がいなかった。

また、一部の学生に私の意識が集中してしまうことで、かえって、今やろうとしていることが見えなくなってしまったということも問題だった。全体的に楽しい場だと思えるところにいると人は自分自身も楽しくなってくるが、全体的に落ち込んだ場にいると、自分自身も落ち込んでしまう。落ち込んでいるところは放っておけばよいのに、わざわざそこに焦点を合わせてしまう。あまり乗り気でない人、落ち込んでいる人たちがその場でクローズアップされるから、余計にその人たちもやる気が失せていく。もっと、乗っているところ、盛り上がっているところをうまく捉えて、作品の核となる部分を早目に仕上げておかねばならなかった。

その日の懇親会で深夜遅くまで、さまざまなことについて

男子学生たちと話をした。それこそ、色恋の話や世間話などたいしたことのない話から、学校とは何か、フリースクールとは何か、教育とは何か、国語教育とは何か、仲がよいとはどういうことか、など教育に関する話など、さまざまだった。そして、今回の講座が話題になった。同じ学科からの参加がたくさんあって、かえって普段の役割から抜け出せず苦勞しているのではないかとといった話や、そういう学生たちが客席側から見て客観的に沈んで（講座に乗り気でないように）見えるとか、そういった話が延々と朝方まで続いた。しかし、こうした雑談をする場を持つことができ、本当によかったと思う。ここに残っているメンバーは、今回の舞台をその根底からしっかりと支えてくれる。そう確信できるような話し合いが、この雑談の時間のなかでおこなわれた。

一見無駄だと思える時間を大切にすること。そのことを考えるとき、高校のときに学園祭で聞いた講演の内容を思い出す。それまでの学園祭の講演会には、河合雅雄や猪瀬直樹といった著名人が講演に来てくれていた。しかし、その年の講演会は、母校の卒業生でアルピニストという肩書きのある、それほどメジャーな人ではなかったと記憶している。しかし、話の内容は、河合雅雄や猪瀬直樹の話の内容よりも印象深く、今でもその内容をはっきりと覚えている。「もだこと（無駄なこと）をどれだけやれたかで、その後の結果が決まる」話の内容を要約すればそのような内容だったと思う。当時、なぜ無駄なことを、時間をかけてやらなければならないのか、全くわからなかった。しかし、今になって振り返ってみると、たしかにものごとの成否は、一見無駄だと思えることをどれだけ多く積み上げたかにかかっている。そう感じるのがよくある。とくに芝居づくりにおいては、それが本当に役に立つのかどうかわからないこと（一見無駄だと思えること）をひたすら積み上げていった先にしか、作品は生まれてこない。そう感じる事が多くある。カリキュラム化され時間割化されているもののなかで処理されていること以外の充実が、ひとつの作品の良し悪しを決定的に分けているように思われる。単純な因果の関係だけでは底が知れてしまう。机上で組み立てられた予定調和的な世界を簡単に飛び越えてしまう、もっと複雑で雑多な世界を構築すること。それには、こうした一見無駄だと思える時間が必要なのだろう。

■7月11日（水）の稽古

本番前日。もう明日が本番、今期埼玉大学に通うのも明日で最後だ。今週は、来週から始まる古民家合宿に向けての事前学習にほとんどの時間が割かれていた。しかし、生徒たちも多少古民家合宿に関しては食傷気味の様子だったし、スタッフの講座準備が間に合わなかったという理由で、

今日の午後は明日の発表に備えて朗読の稽古をする時間にあててもらった。ラストに向けての朗読をもう一度確認した。特にSJくん、SDくんの「風の又三郎」は重要だった。「どっどど どどうど どどうど どどう」の「どっどど」の入りが特に重要なので、タイミングをしっかりとつかむまで繰り返し練習した。全力で前に向かって、ただひとつの点にむかって声を合わせることに。

全力でということが肝心だった。それは外から見れば、身体が動いているかということによって判断できた。瞬間で息を吸う動作が見られるか。一気に吸った息を吐き出すために身体が一瞬で極度に収縮するか。声がでていいると感じるときは、これらの動作がはっきりと見て取ることができる。膝にあそびがあるか。目標となる時計、唯一点を見つめている

か。息は吸えているか。発声の頭の音に集中しているか。その音は周囲とそろっているのか。そろえるために神経を最大限に働かせているか。自分だけいい気になっていないか。全体が集中しているときの朗読は、全体でひとつの有機的な生物のように見えてくる。そして、不思議なことに、そうになったときにはじめて個々人の声がそれぞれの色をもって客席に届くようになる。激しい朗読の最後の瞬間に、一瞬の静寂が訪れる。

今日、最後の稽古でやっとその静寂を感じることができた。土曜日の稽古でだいぶ落ち込んだが、たぶん明日はなんとかなるだろうという気持ちになれた。土曜日の居残り稽古を誘発したのも、彩星学舎の生徒たちの朗読だった。そのことを考えると、なんだか彼らが頼もしかった。

「総合学習研究」 注文の多い料理店 構成表

NO	シーン	内容	TIME	TOTAL
1	プロローグ	■ 私の勝負服		
2	それは林檎	■ 何か 気がかりな 夢から 目をさますと		
3	タイトルコール	■ 注文の多い料理店		
4	注文の多い料理店 ①	■ 輪速読 強く 大きく 早く ■ 注文はずいぶん多いでしょうが ■ どうか一々こらえてください	3'30"	
5	風の又三郎	■ どっどど どどうど どどうど どどう		
6	青空のはてのはて	■ 永久で透明な生物の群れが棲む		
7	注文の多い料理店 ②	■ 輪速読 強く 大きく 速く ■ どうか帽子と外套と靴をおとりください ■ ことに尖ったものは ■ みんなここに置いてください	4'15"	
8	アンドレ・クレージュ	■ 常識いうのん、いっぺん 捨てて		
9	私の一番古い記憶	■ 私の一番古い記憶です		
10	記憶の捏造	■ 過去の修正ならばできる	4'00"	
11	注文の多い料理店 ③	■ 斉読 強く 大きく 速く ■ 逃げろーっ ■ うわあ、がたがたがたがた		
12	サキノハカという黒い花と一緒に	■ 鋼を鍛えるように 新しい時代は		
13	注文の多い料理店 ④	■ 斉読 強く 大きく 速く ■ わん わん ぐわあ ■ にゃあお くわあ ごろごろ	1'00"	
14	風の又三郎	■ どっどど どどうど どどうど どどう		
15	雨ニモマケズ	■ そういうものに わたしは なりたい		
16	ココ・シャネル	■ なんとと言われても 知ったことじゃありません	1'40"	
17	林檎の木の下で	■ 林檎の木の下で		
18	エピローグ	■ さっき一ぺん 紙くずのようになった二人の顔		

8:00。黄色い服とテキスト類を車に詰め込み、彩星学舎を出発する。「とにかく基本ラインを明確にすること。それが今日一番の仕事になるだろう。」そんなことを考えながら車を運転する。「彩星学舎の生徒、埼大生、誰が1時限から来てくれるだろうか。これも賭の要素が大きい。」などと考えているうちに埼大に到着する。不安なまま8:40に埼大のゲートをくぐる。稽古場のダンス室前には、彩星学舎の生徒が6・7名すでにいた。全員気合いが入っている。SJくんは寝ないできたらしい。SRさんはユカタで決めて発声練習までしている。SEさん、SAさんもつられて発声練習をしていた。

9:00 に庄司先生がおみえになる。「いるメンバーで出来たところまでが作品」と、自分に言い聞かせながら稽古場に入る。このとき彩星学舎の生徒スタッフは、全部で 10 名程度だった。埼大生はまだ誰もいない。庄司先生と簡単な打ち合わせ。庄司先生は今日一日ビデオ撮影など、記録を撮って下さるとのことだった。打ち合わせが終わると直ちに稽古に入る。ダンス室の鏡のある面を背中にして、なるべくぎゅっと中心によってもらった。はじめから立ち稽古だと疲れてしまうので、全員床に座ったままで朗読を始めることにした。稽古は前日に練習した「雨ニモマケズ」の朗読、「ココ・シャネル」の朗読から始めた。とにかく、ここが作品の腰(要)にあたる部分になるだろう。SB さんの力強い発声に続けて「雨ニモマケズ」と繰り返される。声の出し方、力の入れ方でいったら、SB さんは彩星学舎でもピカ一だ。彼の声につられる形で徐々に周りの生徒の声も出てくるようになる。続いて SE さんの「ココ・シャネル」のくだりの練習に入った。SE さんも相当ひとりで練習していたようで、しっかりと声が出ている。発声をしていると徐々に参加者が増えてきた。遅れて来た SC くん、SK くんが朗読に参加する。庄司先生と 3a さんはアコーディオンを取りに一度席をはずす。しばらくすると埼大生の 5f くんが来てくれる。輪速読の途中の斉読を合わせたかったので、5f くん、彩星学舎スタッフ松矢くん、輪速読をしてもらう。第 3 のパートから最後にかけての流れを創ってしまうことが先決だと考え、今いるメンバーでラスト近辺を創り始めた。さらに埼大生の 5b くんが来てくれる。3a さんも加わったので、取り敢えず輪速読のメンバーを固定する。5b くん→5f くん→SR さん→松矢くん→3a さんの順で輪速読することに決め、さっそく輪速読と斉読の稽古を始める。「注文の多い料理店」の「そのとき」からの朗読で、一斉に朗読するところの一番初めは「わん、わん、ぐわあ」だった。こういうときに彩星学舎の生徒は本当にありがたいと思う。前

日の午後に稽古をしていたとはいえ、こちらに向かって本当になすすぐ声を出してくれる。ストレートに、何の銜いもなく、発話者と対象者の距離をゼロにしてくれる。埼玉大生の**5b**くんや**5f**くんもやはり前に出てきてはくれるが、稽古のはじめはどうしても声が内向してしまう。そういう彼らを、まわりの雰囲気サポートしてくれている。彩星学舎の生徒が、とにかくどかーんと声を出してくれるので、**2**人とも徐々に声が劈かれていった。「注文の多い料理店」の「どうもおかしい」から始まり、「サキノハカという黒い花と一緒に」を挟んだパート**3**の部分を読み返し稽古した。だいぶ流れが出来てきたので、前半にさかのぼってパート**1**の輪読も稽古をした。パート**1**は「注文の多い料理店」の「**2**人は云いながら、その扉をあけました。」から、「風の又三郎」「どっどど、どどうど、どどうど、どどう」、「青空のはてのはて」を挟んで、狩人の**2**人が洋服を脱ぐまで、というシーンだった。ここでも彩星学舎の声の迫力に助けられる。特に**SJ**くん、**SB**くんの「どっどど、どどうど、どどうど、どどう」は稽古場全体に一本筋を通してくれた(後半の稽古で合流する**7j**さんの声に加わるとさらに迫力は増した。朗読をするときの**7j**さんの顔にも迫力があつた)。本来朗読すべき人がいないところは小林が代読しながら、全体の流れを創る稽古を続けた。「青空のはてのはて」を朗読するメンバーはいなかった所以小林が代読した。輪読の流れと斉読の迫力が大分整ってきた。**10:30**までの稽古で、ここまでを確たるものにしておく必要があつたので、夢中で小返し稽古を徹底した。しかし、そうこうしているうちに、あっという間に**10:30**になってしまった。

休憩時間の間に次々と埼大生がやってきた。きちんと説明している暇はないので、来た順にどんどん朗読の輪の中に入ってもらった。この時点で彩星学舎の生徒もほぼ全員集合した。埼大生の 5e くんが体調が悪く舞台発表に参加できないと申告してきた。彩星学舎の舞台では、本番当日、心身の状態で参加ができなくなるケースがよくあるので、こういう場面でも私自身あまり困惑することとはなくなった。昔、「親が死んでも舞台はこかすな」と教えられてきた私には、いかなる理由があっても当日舞台にでられないということは考えられなかった。その頃から比べると、自分の意識も格段に変化したのだと改めて思った。参加できない旨了承したという返事をしたら、本番は客席で見学してくれるとのことだった。見ての感想を提出するようお願いした。実は客として舞台を見るということも大切な舞台参加といえる。そのこと自体も、彩星学舎の舞台づくりから学んだ。逆に、身内のご不幸で出られないと思っていた 7r さんが参加できることに

なったのはうれしかった。心身ともに大変なときだと思うのだが、それを押しても参加してくれるという事実が単純に嬉しかった。

11:40.いよいよあと1時間半後には舞台発表になる。正直、ここまで舞台稽古が進まなかった発表会もない。しかし、今頃そんなことをいっても仕方がないので、「いるメンバーで出来たところまでが作品」と、自分に再度言い聞かせて稽古をスタートさせる。ただ、ベースになるパート1とパート3からラストにかけては練習してあるので、とにかくそこから稽古をはじめることはできた。全体の流れがつかめるように、自分がそのとき何をしなければいけないのか分かるよう、彩星学舎のメンバー+5bくん、5fくんが創った部分の通し稽古からはじめた。こういう稽古では、さすが埼大生だと感心する。パートごとで各自がやるべき仕事を、こちらが十分に説明しなくても各自充分に理解しどんどんやっていってくれる。全員で声を合わせるところもさっと合わせてくれる。さらに、今日前半の稽古で彩星学舎のメンバーの声もテンションもあがっているの、それにつられる形で大きな声まで出てくるようになった。この瞬間、「今日の舞台は大丈夫だ」という確信を得た。輪読のパートはそれまで稽古してきたメンバーとは違っていた。しかし、今日の稽古をベースにしないと構成の屋台骨が崩れると思い、今日ここまで稽古してきたメンバーで固定した。10:40の段階でさらに、5gくん、7fさんを輪読に加える。5gくん、7fさんはそれまでの稽古から張りのある輪読向きの声をしていることは知っていた。5gくんは自分から輪読に加わって来てくれたが、7fさんにはこちらから声をかけた。これで輪速読の部分は5bくん→5fくん→SRさん→松矢君→3aさん→5gくん→7fさんの順で決まった。とにかく相手の読み終わりを捉えて、自分のセリフを掛けていく。前の人の最後の一字に完全に自分の言い出しのことが掛かるように、何回か繰り返してタイミグを覚えてもらう。これができると全体の朗読にリズムが生まれる。できないと失速する。全体がもたつく。しかし、輪速読に関しては微調整をおこなうだけで大丈夫そうだった。輪速読が決まると今度は全員で斉読するセリフの確認に入った。特にパート1とパート3の部分は輪速読の合間に斉読の繰り返しの台詞がはいってくるので、「何と言っているのか」と「どのタイミグで言うのか」ということを、徹底して繰り返し稽古した。

パート1では「風の又三郎」「青空のはてのはて」、パート3では「サキノハカという黒い花と一緒に」が途中で挿入される。このメンバーに舞台前面に出てくるタイミグと読むときの諸注意を指示する。特に「青空のはてのはて」では、テキストを読む際にブレスを入れて欲しいところに大きく○をいれてもらい、声に出さず心の

中でその○を「マル」と読みながら、朗読してもらうことをお願いした。前回の土曜日の稽古で「サキノハカという黒い花と一緒に」を朗読したメンバー、5gくん、6dさん、3aさんをお願いした内容と同じだった。なぜ、そのような仕掛けを必要とするのかということ、それは息継ぎと非常に大きな関係がある。稽古があまりなされておらず、気持ちばかりが焦っているときや、テキストの書かれている内容に強く影響をうけて気持ちだけで朗読をしている場合に、よく起こりがちな現象というのがある。それはテンションがあがると、とにかく朗読のスピードがものすごくあがってしまうということだ。スピードがあがると当然息を吸う時間も短くなる。息を吸う時間が短くなると、吐く息の量に比例する声の大きさにも影響がでてくる。気持ちがのりすぎてしまったり、気持ちが焦ってしまったときなどに、えてして息が吸えなくなってしまう。それが、数人でおこなう朗読だと、それぞれがそれぞれを刺激して、どんどん速い朗読になってしまう。お互いがお互いを止められず、暴走してしまう。肩で息をしているから、吸った息の量も少ない。マラソンで肩で息をしている人は、一目でもうこれ以上走るとは無理だと分かる。同じように、スピードが上がり肩でしか息をしていない人たちの朗読は、見ていて苦しい。こうした苦しい呼吸の解消法として、「マル」を挿入した朗読を心がけてもらうことにした。「サキノハカ」の稽古では、3人の呼吸がこの方法でビタツときまった。特に、タイミングがあってきた後の6dさんの目がすごかった。刺されるのではないかと言うくらい鋭い視線だった。それから、もう一点。単語の一語一語が立ってくるように発声してもらいたいという思いもあった。息を吸わないで一文を一気に読んでしまうと、単語の一語一語が流れてしまい、全体として印象の薄い朗読になってしまう。特に、7aさん、7dさん、7sさん、6cさんは、このメンバーで「青空のはてのはて」の練習をしたことがほとんど無く、したがって、単語のひとつひとつを合わせていくというのがけっこう難しかった。そうした問題をクリアーするためにも、揃えるべき単語の直前に「マル」を入れて、お互いがタイミングをはかる必要があった。「マル」を入れて2・3度稽古を繰り返すうちに、声の勢いとタイミングがそろっていった。

パート2は「アンドレ・クレージュ」「私の一番古い記憶」「記憶の捏造」と続くシーンだった。このパートは、それまでのパート1でどれだけ観客の集中を取り付けられるかに掛かっていた。全体の構成は、パート1で賑やかにはじまり観客の集中を取り付ける。パート2では比較的静かにしっかりと聞かせる。そして、パート3では一気にテンションをあげラストスパートで観客を押し切る。大まかにいうとそういう構成になっていた。だから、

このパートではそんなに大きな声はいらないと思っていた。しかし、「アンドレ・クレージュ」のくだりでは、予想以上に声が出ていた。バランスも7bさん、7nさんチームと、7cさん、7gさん、7pさんチームで非常にバランスがよかった。7pさんのニコニコ顔が印象的だった。何がうれしいのか、見ている方までつられてニコニコしてしまいそうな笑顔だった。ニコニコ顔の印象のせいか、思った以上に華やかなシーンとなっていった。「私の一番古い記憶」は、7eさん→7dさん→5aさん→7hさん→7aさんの順で朗読してもらった。出てきた並び順での朗読だった。構成の段階では、「私の一番古い記憶」のシーンを長くとりすぎると、間延びして観客の集中が途切れてしまうと考えていた。しかし、当日の稽古の様子で、それまでの朗読の勢いと直前の「アンドレ・クレージュ」のシーンを考えると、「私の一番古い記憶」の時間が延びても大丈夫だと思えた。そこで5hさん、7mさん、7nさんにも、このパートに加わってもらった。静かに、淡々と朗読される記憶の断片は、前半の朗読とのコントラストから観客の耳によく届いた。しっかりとして落ちつきのある素敵なシーンとなった。そして、それを後方から支えてくれたのが、「記憶の捏造」のシーンだった。7kさんにしろ、7qさんにしろ、声の色がたいへんクリアだった。このテキストの読み手を2人に決めた時、7bさんが「やっぱり」というような発言をしていた。「声がきれいだから選ばれた」という内容の発言だったと思うが、言われてみて、たしかに自分でもそういう基準で選んだのだなあ、とあらためて思った。静かなシーンをさらにぐっとひき締めてくれるのに、非常に適した透明でクリアな声だった。

パート1からパート3までを駆け足で創り休憩をいれた。ラストシーンの「林檎の木の下で」をつくってしまうために、大黒舞を処理しておく必要があった。大黒舞はSRさんが持ち込んだシーンだった。埼大での稽古が終わると、彩星学舎に戻り3aさんと繰り返し練習していた。かなり練習されていたので、曲にあわせて踊りを構成し直すことは簡単だった。本人たちにとっては簡単ではなかったかもしれないが、他のシーンと比べると、稽古をしてあった分だけ融通がきいた。演奏に合わせて納まりの良い終わり方に構成し直した。パート3からの流れをもう一度確認しつつ、ラストの歌の練習へと移行していった。バンドメンバーに関しては申し分なかった。コントラバスの5dくん、アコーディオンの5cくんとは、土曜日にかなり詰めて話をすることができた(5fくん、5bくんも含め、土曜日はかなり広範にわたって意見交換することができた。この意見交換がなかったら、今回の舞台はどうなっていたかあやしいと思えるほど、貴重な時間だった)。6bさんも突然のピアノカによく対応してくれた。歌での参加の

7oさんは、当日自転車事故でけがをしたにもかかわらず参加してくれた。SGくんが自分からトライアングルをやりたいといったときには驚いた。ここのところ3年生の自覚が芽生えてきたせいか、3年になったら自分たちが覚悟を決めてやるものだと思っているらしい(3年生の自覚という意味では、SHくんもSDさんも同じだった)。SKくんのタンバリンにも驚いた。知らない間にタンバリンをもって合奏に参加していた。全体のリズムがとりにくい1番は休んでもらって、埼大生の合唱が入る後半からタンバリンを叩いてもらった。なかなか味のあるリズムになった。楽器を用意して下さった庄司先生、楽譜を用意するなど段取りをとってくれた松矢くんにはたいへん感謝している。合奏の1番のはじめから彩星学舎の生徒の朗読をかぶせた。参加が危ぶまれたSCくんにはリード役をお願いした。歌、踊り、朗読、合奏と、ラストはかなり重層的なシーンになった。惜しむらくは、あと3回、このシーンが稽古できたら、もっと完成度の高いものになっていただろうということだ。それは、稽古時間の読みを間違った私の最大のミスでもあった。シーンのプロローグとエピローグ的なシーンに、7iさんと7lさん朗読をお願いした。短時間によく対応してくれたと思う。しかし、やはりもっとつつこんで稽古をしたら、もっともっとおもしろいシーンになったのではないと思う。いずれにしても、これで全てのシーンは出そろった。

11:45。最初で最後の通し稽古がスタートする。「私たちはこの稽古期間を通して、別になかよしになったわけではありません。でも、なかよしを至上の価値としなくても、ものを創ることはできる。そのことをこの舞台によって証明したい。」これが、全員にかけた最後のことばだった。スタートの段取りだけがうまく行かなかったもので、そこだけ止めて、もう一度最初からやり直した。

■本番

本番はよくここまで間に合ったなと思う反面、もっと稽古がしたかったという思いも強かった。それはたとえば次のような場面で象徴的に現れた。本来、台詞を発するときのタイミングの取り方は前の人の台詞との関係で決っていた。だから、複数の人間が同じ台詞を朗読する瞬間の出だしのタイミングは何か特別なサインを出さなくてもいいはずだった。「せーの」とか「いい?」、「行くよ」という合図がなくても、呼吸を始めるタイミングが決っているので、それによって台詞の入りはそろえることができたはずだった。しかし、本番では、「せーの」という合図を送る人たちがいた。これは稽古すれば何とかなった問題だけに、この瞬間だけはもっと稽古できていればと悔やまれた。

ラストのシーンで大きな山場がまっていた。SBくん

の「雨ニモマケズ」「風ニモマケズ」が会場にこだまする。全員がそれに続く。しかし、次の瞬間、ほんとうに1秒程度だと思うのだが、台詞が出てこない。SGくんが緊張しすぎたためか、台詞をすっ飛ばしてしまったのだ。ほんの何秒かだったが、このときいままで一番の緊張感が舞台に現れた。しかし、そんなことがわかっているのは稽古をしたものだけで、はじめてみる観客にはわかるはずもなかった。すかさず彩星学舎のスタッフ松矢くんが「そういうものに」と台詞を入れる。参加者は何事もなかったかのように「そういうものに」と繰り返す。松矢くんが続けて「私はなりたい」という。全員があとから、「私はなりたい」と続く。まさか、ほんとうにそういう場面がくるとは思っていなかった。しかし、誰ひとりとしてSGくんの方を見る人はいなかった。おかげでSGくんがミスをしたということにはならなかった。少なくとも観客からはまったくわからなかった。ラストの「林檎の木の下で」も終わり、舞台は終了した。

■舞台終了後

驚いたことに多くの学生が次の講座があるにもかかわらず、その場に残っていた。彩星学舎の生徒に話しかける学生の姿も見受けられた。私も参加者ひとりひとりに話しかけてみた。はっきりとそれぞれの顔が見えた。

【最終レポートより】

すべての講座が終了した。今年度の活動に関して次のふたつの課題でレポートを提出するよう学生さんたちにお願いした。

【課題1】舞台発表で私たちが体験したことを記述する。

【課題2】この講座を通しての感想（感じたこと、考えたこと）を記述する。

【課題1】について

ラストのSGくんについては、ほぼ全員が言及していた。「雨ニモマケズはアクシデントが発生した。一番大事な最後のセリフが数秒つまってしまった。私が言おうか、でもどうしようと考えていると松矢さんがかわりに言っていた。あの早い判断力はすばらしかった。」「ここになって初めて先生が「誰かが言えなくなっても違う誰かがフォローすればそれは失敗にはならない」と言っていたことを思い出す。そこで松矢さんが代わりに言った。先生はもしかしてこうなることを予想していたのかなと感じた。」「その時に総合演習メンバーの心が最も一つになった場面がおとずれた。あの時は後からビデオを見た時はほんの3秒程度だったが、ものすごく長く感じられた。」「一度心の中で確かめた瞬間、松矢さんがかわりに飛び込んだ。この時、みんなが一つになったのを感じた。」

「後から周りの観客に聞いてみたところ演出の一環だと思っていたらしいのでナイスリカバリーであった。」など、ほぼ全員がこのことに言及していた。

また、朗読終了後、雨のなかダンス室に移動するという記述も目立った。「ダンス室に戻る時、外は結構雨が降っていた。」「本番が終わってダンス室に戻る。雨が降っていた。」

【課題2】について

「終わってからも、「注文の多い料理店」のキーワードが出てくるとそれに対応するようになってしまいました。「パソコンの調子がおかしい」と言っただけでも、7aさんとかが、「どうもおかしい、僕もおかしいと思う」とすらすら出てきてしまい、会話が成り立たずに逆に困っています。」

「さっきまでもちろん5gくんも一緒にレポートを書いていた。口では、「体験の記述が短くてすむ」と言っていたが、心の重みでは、彼の方が意味は大きいかもしれない。彼の活動も含めて作品であったと言いたい。」

「決して楽しい授業だったわけではないが、周りが自分と考え方が違う人たちだった中で、考えを深められたこと、実際のフリースクールの生徒たちと接することができたこと、舞台には参加できなかったが、練習に参加しながら外からの目線で舞台を見ることができたこと。以上の体験が、今後教育というものを考えていく上で、多少なりとも考えに影響を及ぼすであろう。」

「小林先生は、学生をきちんと名前呼びます。いつも来ていて、目立つ感じの学生だけではなくて、ほとんど全員のことを名前と呼ばれていました。大学の授業で、学科の先生以外に名前と呼ばれることはなかったので、すごく嬉しかったです。」

「演劇ではないけれど、人前に出てみて初めてわかったが、人の目に曝されるのは怖い。見られているのはすごく怖いと思った。その恐怖を取り除けるのは、稽古しかないのだとも思った。自分が自信を持って出せるものでなきゃ、人前には出られないのだと。それを知ることができただけで良い経験をしたと思った。」

「彩星学舎を訪れて、群読の練習をした時は彩星の人の声のよく通ることに驚きました。私たち大学生は大きな声を出すことに多少躊躇っていたけれど、彩星の人たちはそんな様子など全くなく、むしろ私たちを引っ張っているように思いました。」

「でももっと忙しくないときに取れていたら、もう少し得したなと思えることが増えたかもしれないと思うと少し残念。」

「2回目の彩星学舎への訪問の際、一晩を通して様々な話ができただことはある意味でこの授業を受けて最も良か

ったと思えることである。学科の友達と話すこともたまにあるが、やはり小林先生も言っていた通り、いつもとは違うメンバーが一人いると私たちだけでは出てくることのない意見や疑問を投げかけてくれ、それに呼応して自分たちの中でもそれまでにないような考えが生じたりして話していてとても面白かった」

「おそらく今まで出会ったことのなかったタイプの人にたくさん出会えたことだと思う。上に書いたように小林さんはもちろん、彩星の生徒さんも出会ったことがない人が多かった。いや、小林さんが言っていたように無意識のうちに意識の中から除外していたのかもしれない。」

「もっともっとみんなと話したかったです。特に小林先生の考え方は人とは違っていておもしろいと思いました。誰かが小林先生は宇宙人って言っていましたが、私もそんな気がします（笑）」

いろいろあったが、最後はなんとか落ち着くところに落ち着いたという感じだった。埼玉大学の学生たちにとって、彩星学舎がいつまでも異星人であり続けられたらと思う。仲良くならなくても舞台をつくることはできる。とりあえずそのことが証明できたのではないかと思う。

4. おわりに

以上、これまでみてきた稽古の実際を、「そこではいたい何がおこっているのか」で考察した、稽古の過程で必要な言語実践と関連させて考えてみたい。実際の現場では、「実践について語る」言説も「実践の中で語る」言説も、截然と区別できるようなものではないということがわかる。それらはお互い複雑に交錯しながら、次第に形成されてきているともいえる。特に、「実践について語る」言説は、それ自体、演技の習得にはさほど重要ではないにもかかわらず、常に稽古の過程で必要とされていることがわかる。演技の習得にまつわる言説は、何ができて何ができなかったのかを特定する行為の判断基準や、身体の変容させることに力を発揮する比喩的なイメージとして、稽古の過程に現れてくる。それらは、演技の実際を考えていくうえでは非常に意味がある。これらの言説は、私たちが今まさになそうとしていることに対して、それを「どのように」おこなうかの指標を与えてくれる。しかし、こうした言説は、今「なぜ」それをおこなわなければならないのか、という問いには答えてくれない。そこで絶えず稽古の過程では、「実践について語る」言説が要請されてくることになる。しかし、そうした要請から必要とされる言説も、実際の稽古の過程とその形成を一にしない場合、リアリティーのない観念論に終始してしまうだろう。そう考えるならば、「障害とは何か」「不登校とは何か」「総合的な学習とは何か」とい

った問いも、常にそれが実践との関連のなかで模索されないかぎり、抽象的で観念的な空論に堕してしまう可能性がある。今後は、そうしたプロセスにこそ注目していかなければならないのではないだろうか。

【注】

- 1 個々のワークの具体的な内容については、フリースクール彩星学舎の演劇公演各報告集を参照。
- 2 「輪速読」については「朗読と即興（小林 2005）」を参照。
- 3 すでに4月から講座は開講されている。しかし、彩星学舎の生徒が講座に参加するようになるのはG・W明けの週からだ。ここで庄司先生からいただいたのは、4月におこなわれた講座の学生レポートだった。
- 4 毎年そうなるわけではないが、今年は時間割の都合からか、教育学部の同じ専科から23名が登録していた。
- 5 SFくんの燻製は講座の最後に参加者に配られた。のちに試食を楽しみにしている学生もあらわれるほど好評だった。
- 6 このレポートの記述から、今年の講座では「普通とは何か」、「障害とは何か」をめぐる言説が展開していくことになる。講座のはじめは観念論でしかなかったこれらの言説も、講座の後半には舞台を成功させようというモチベーションへと変化していった。
- 7 今、講座初日の感想を振り返ると、自分自身が大学生に対して無謀な要求をしていることがよくわかる。自分が学生としてこの講座をとっていたら、今日1日でかなり混乱したことだろう。「なぜ」と思うことがたくさんある。しかし、それらはほとんど説明されず、ワークだけがどんどん進行していつてしまう。対応する方は大変だと思う。初日のワークは、私が実際に体験したワークショップをもとに構成されている。私が所属する劇団や日本演劇教育連盟のワークショップで私自身が実際に体験したものが多い。それらをもとに私は10年近くワークショップを実施してきた。しかし、その場にあわせて変形が加えられているので、オリジナルのワークとはだいぶ異なったものになっている。
- 8 どのワークをおこなうかは、講座がはじまる前におおよそ決めである。しかし、実際にワークをおこなうなかで、状況に応じてワークの構成を変更する場合もある。むしろ、変更する場合の方が多いかもしれない。全体の流れが悪くなっているときに、講座にはいる前に決めた構成にこだわってしまうと、さらに流れを悪化させてしまう。
- 9 自分の声、他人の声を、「意味」ではなく「声」そのものの性質に注目して聞くワーク。6月9日に実施された。
- 10 ワークを切り上げるタイミングというのはむずかしい。うまく説明できていなかったり、面白く展開していなかったりする場合、どこでそのワークに見切りをつけるのか。どの程度そのワークを引っ張るべきなのか。粘っているとおそらく展開する場合もある。逆に、全体が盛り上がっているからといって、

同じワークを引っ張りすぎると、次の瞬間、極端に散漫な状態に陥ってしまうこともある。ワークが盛り上がっていても私は、もう少しと思うところでやめることにしている。

11 彩星学舎では、問題がおこったときにはなるべく全体化することになっている。個別に対応していると「問題をおこせばスタッフが個別に対応してくれる」という認識が蔓延しはじめる。そうなると、気にしてもらうための手段として、あえて問題を起こす場合もでてくる。また、問題を個別に処理していると、問題を起こした側の反応も一樣化してくる。何がどのように悪かったのかがわからないまま、一方的に謝罪して終わりということにもなりかねない。それぞれの認識がどの点で異なっているのか。個別に処理するのではなく、彩星学舎全体のなかでそれぞれ異なる認識をまずは持ち寄ってみる。どこが他の人の認識と異なっているか。持ち寄った認識を互いにつき合わせる。公の場で、問題の原因を徐々に浮かび上がらせていく。問題の時系列を確認し、認識のずれを摺り合わせることによって、原因を確定していく。時間はかかるが早めに問題を全体化することで、ダメージを最小限に食い止めることができる。こうした作業に手を抜くと、2 次的にも 3 次的にも被害が拡大する場合が多い。また、そのこと自体が周知の事実になっていくので、方向性さえうまく出せば、問題だったことも問題を起こした人の特性として、集団のなかでプラスに転じさせていくことも可能である。

12 実際には、聾啞であることは当たり前の前提として、すでにふたりの間では意識もされていなかっただろう。だとすれば、そうしたなかで何十年と積み重ねてきた、個別的で具体的なふたりのコミュニケーションのカタチこそが重要なかもしれない。

13 こうした話をしているときの彩星学舎の生徒の反応も興味深い。その場でことさら自分の診断名を口走る生徒や、休憩時間に過去の物語を語る生徒もいる。「問題なのは過去の私たちではなく、これからともに何をつくっていくのかだ」ということに気がついていれば、彼らが語る物語をおおらかに受け止めることができる。しかし、中途半端に共感しながら聞くと、いつのまにか彼らのペースに巻き込まれてしまう。

14 この他にも、もどかしさを体験できるワークはいくつかある。「右手で三角を描きながら、同時に左手で四角を描く」このワークもそのひとつといえる。また、「左右の手、同時に指を折りながら数を数える。このときに、どちらかいつぼうの手だけ、あらかじめ親指を折った状態から数を数え始める。」これもかなりもどかしさを体験できる。さらに、これらのワークを大勢の前でひとりだけでやる。慣れない動きを人前でやらなければな

らないプレッシャーは相当なものだ。加えて、これらのワークをタイムレースにすると、半端でないほど重圧は増す。

15 竹内敏晴のワークショップでよく取り上げられるが、オリジナルとはだいぶ変更が加えられている。

16 カフカ『変身』新潮社（1952）文庫本による。

17 寺山修司 1991『寺山修司の仮面画報』平凡社 寺山が母親の記憶を捏造する回想シーン。

18 清水義範 1992『世界衣装盛衰史』角川書店 参照。

19 宮沢賢治『宮沢賢治全集（全 10 巻）』はちくま文庫（1995）の文庫版によった。

「なんといわれても、まあ、知ったことではありません」参照

参考文献

鵜飼正樹 1994『大衆演劇への旅 ― 南條まさきの一年二ヶ月』未來社

小林久夫 2005「朗読と即興」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』（4）

埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

小林久夫編 1999『彩星学舎夏期特別講座「あしたの日記」報告集』彩星学舎

2000a『彩星学舎春期特別講座「エルマノの O（オー）」報告集』彩星学舎

2000b『彩星学舎夏期特別講座「ワイルドキャットハウス」報告集』彩星学舎

2002a『彩星学舎春期特別講座『ハッピープリンス』報告集』特定非営利活動法人彩星学舎

2002b『特定非営利活動法人設立記念彩星学舎演劇公演『たゞお日さまの光ばかり』報告集』

特定非営利活動法人彩星学舎

2004『特定非営利活動法人彩星学舎演劇公演 第 6 番『チョコレット』報告集』

特定非営利活動法人彩星学舎

2003『2003「学び」実践研究会報告集』特定非営利活動法人彩星学舎

2004『2004「学び」実践研究会報告集』特定非営利活動法人彩星学舎

2005『2005「学び」実践研究会報告集』特定非営利活動法人彩星学舎

2006『2006「学び」実践研究会報告集』特定非営利活動法人彩星学舎